Newspaper in Education

教育に新聞を

NIE

エヌ アイ イー

実践報告書

2020年度

静岡県NIE推進協議会

は　じ　め　に

～2020年度を振り返って～

静岡県ＮＩＥ推進協議会
会長　安倍　徹

本年度のＮＩＥ推進協議会の活動を振り返ってみますと、新型コロナウィルス感染拡大のために、総会（６月）は持ち回り審議となり、実践校交流会（７月）はやむなく中止としました。また、ＮＩＥ全国大会東京大会（11月）もオンラインによる開催を余儀なくされました。

このような状況の中、実践発表会も参加者数を絞って２月20日に行いました。日々の教育活動が制限される中でも創意と工夫を凝らした、実践指定校におけるＮＩＥ活動が報告されました。教育実践に取り組まれた教職員の皆様に、まずもって感謝を申し上げます。

また本年度は、長期にわたる休校期間を中心にオンライン学習が行われ、その効果と課題が顕在化した年度でもありました。国においてもＧＩＧＡスクール構想が進められており、これまでその必要性が叫ばれていながら、なかなか進まなかったＩＣＴ教育は、児童生徒への一人一台端末の施策と相まって、今後急速に広まっていくものと思います。

このような動きを受けて、本年度の実践発表会においても「新聞紙を用意するという問題から解放された新たなＮＩＥ活動を考えていく」必要性を提起した報告もありました。「ＮＩＥ活動とＧＩＧＡスクール構想」は、今後の大きな実践研究テーマになっていくものと思いますが、本年１月に中央教育審議会から出された答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」の中に今後の方向性として、ＮＩＥ活動を考えていく上での心構えとなる次のような記述がありました。「一斉授業か個別学習か、履修主義か修得主義か、デジタルかアナログか、遠隔･オンラインか対面･オフラインかといった、いわゆる『二項対立』の陥穽(かんせい)に陥らないことに留意すべきである。どちらかだけを選ぶのではなく、教育の質の向上のために、発達の段階や学習場面等により、どちらの良さも適切に組み合わせて生かしていくという考え方に立つべきである」。

教育施策は、よく振り子にたとえられて論評されますが、振り子を直線的ではなく円環的に運動させるという発想が求められているのだと思います。このような視点に立ったこれからのＮＩＥ活動に期待しています。

本報告書には、実践発表会で報告していただいた８校における児童生徒の発達段階に応じた取り組みが収められています。各学校の教育活動を展開するうえで、参考にしていただければ幸いです。

結びに、本報告書の作成に御協力をいただいた関係者の方々に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

目　　次

◆情報伝達力の向上を目指して　～NIEを活用した実践～
西伊豆町立田子小学校　土 屋　由 子…… 3

◆自分の考えを深め、広げるNIE
伊豆の国市立韮山南小学校　山 本　順 也…… 7

◆新聞で学びが繋がり、自分ごととして考えていくよろこび
静岡市立清水飯田小学校　小 川　訓 靖……11

◆みんなで　いつも取り組むNIE教育
吉田町立自彊小学校　大 柳 知穂乃……16

◆児童が新聞に親しみ、言語能力を高める取り組み
湖西市立白須賀小学校　鈴 木　芳 樹……21
加 藤 健太郎

◆NIEを通して「社会」と「自分」をつなぐ
常葉大学附属橘中学校・高等学校　杉 山　光 輝……24
塚　本　　学
（現 常葉高等学校）

◆学びが深まり広がるNIE
静岡県立清水西高等学校　吉 川　契 子……30

◆情報リテラシーの向上を目指して　～NIE実践を通じて～
静岡県立浜松西高等学校　吉 田　忠 弘……35

情報伝達力の向上を目指して

～NIEを活用した実践～

西伊豆町立田子小学校　　土屋　由子

１．はじめに

本校は、伊豆半島西海岸にある西伊豆町の学校である。夕日の町として知られる西伊豆町は、県内有数の観光地でもある。また、本校がある田子地区は、マルちゃんで知られる東洋水産の創業者出身のまちであり、昔はカツオ漁で栄え、現在もかつお節、塩カツオを製造する商店が残っている地区である。

本校の児童数は、全校で49人である。複式学級をもつ小規模校であり、午前５時間制の日課を導入している。

２．実践の概要

（１）実践目的

本校は、ＮＩＥを校内研修の柱として、学校全体、全教職員で取り組んできた。全教職員が新聞を活用して展開していく中で、自分の学びを他の人に理解してもらう力、すなわち情報伝達力の向上を目指した。

（２）実践計画

１年目は、何をどのようにしていったらいいのか手探りの状態だった。とりあえずやってみるしかないと、今までのＮＩＥの取り組みを探し、できるものから実践してみたり、新聞が子どもたちの身近にあるものとなるように環境を工夫したりすることから始めた。

子どもたちが毎日通る１階廊下に設置
新聞の整理・整頓は委員会活動として行った

２年目は、情報伝達力の向上を目指して、先生方の中からこんなことにも使えるのではないかと授業の中で新聞を活用する具体的な実践に取り組んだ。

３年目は、２年目の実践を踏まえて、学習の１つのツールとして新聞活用が生活の中で定着するように取り組んできた。

（３）実践事例

【１年生の実践】

①生活科で秋探し

月ごとに、見つけた秋を廊下に飾ったり、付箋に書いたりする。さらに、地域の様子を掲載している写真を切り抜いて掲示しておいた。子どもたちは、新たに加わる写真を見ては自分たちが見つけたものとつなげたり、自分の体験とつなげたりしていた。秋が終わった頃に、付箋を月ごとにまとめていくと、９月は果物や虫、10月は木の実、11月は落ち葉が多いことに気づき、地域の新聞の写真にも、同じようなものが掲載されていることが分かった。

子どもたちが見つけた秋は、時間がたつと色が薄れたり、なくなったりしてしまうが、新聞の写真は残るので、秋を振り返るのにとても有効だった。

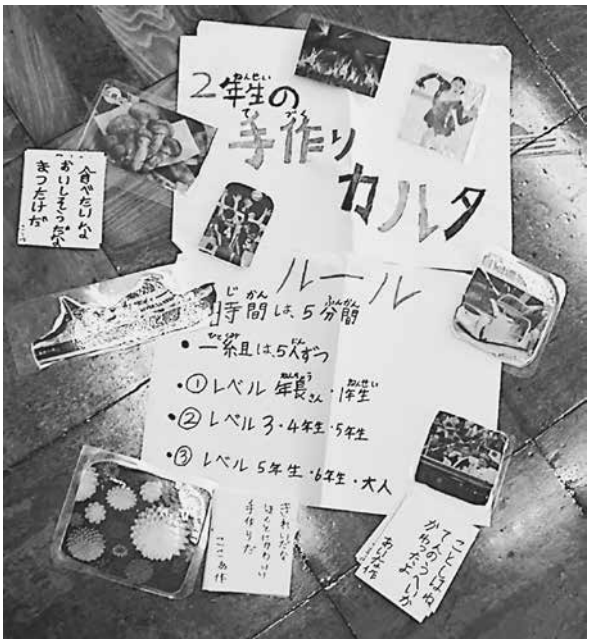
②新聞から季節が分かる写真を探し、そこから感じたことを書く。

１回目の春では、「花が写っています。」と事実を書いた子や「きれいだと思います。おじいちゃんもおばあちゃんも喜ぶ。」と思ったことを書いた子もいて、差があった。しかし、２回目の梅雨探しでは、「行ったことがないから、行ってみたいと思いました。」と、写っているものから思いを広げられる子も出てきた。３回目の夏探しでは、子どもたちが進んで新聞から季節を探すようになった。「いろんな色の花火だからすごくきれいでした。」と発表した友達に対し、「明るい色できれいです。」「虹色みたいできれいです。」と同じように色に注目していても違う言葉を使って表現しようとする姿が見られた。交流を通して色々な表現があることを子どもたちは学んだ。４回目の秋の実践は、国語「わたしのはっけん」と関連づけた。色や数、形や大きさなど気づいたことをカードに書き出すという学習を活かし、「赤色がたくさんあってすごくきれいだと思いました。」と何を書くと伝わるか考えて詳しく書けるようになった。

【２年生の実践】

①手作りカルタづくり

６校時のクラスタイムを使って、気に入った新聞の写真を切り抜き、自分の宝箱の中にストックしていった。そして、お気に入りの写真を使って『手作りカルタづくり』に挑戦した。新聞から切り抜いた写真に五・七・五の俳句を作り、新聞の切り抜きを取り札、俳句を読み札とした。１年生を招いて『手作りカルタ大会』を開き、好評だったこともあり、児童集会である『チャレンジ集会』の出し物として、他学年や保護者にも楽しんでもらった。



②学習発表会『田子っ子発表会』

学習の成果を発表する『田子っ子発表会』で、お気に入りの１枚の写真を紹介した。子どもたちは、その写真を選んだ理由や、その写真から創作した話などを、堂々と自分の言葉で発表することができた。

【５年生の実践】

①新聞記事の感想・要約を書く。

話題性のある記事や子どもたちの興味関心を引く記事を選択した。重要な内容・根拠となる部分は、見出しに隠されていることにも改めて気づくことができ、より見出しの重要性について知ることができた。

②新聞記事に対して意見文を書く。

新聞に投稿されている内容に対する意見文だったり、道徳の内容に絡めた内容に対するものだったりを選んだ。子どもたちは、実体験と絡めながら素直な気持ちを書いていた。この頃からは、子どもたちの書いた文をお互いに読み合って相手の考えを知ったり、その考えを聞い

て自分はどう思うかなど、意見交流の場も作っていったりした。

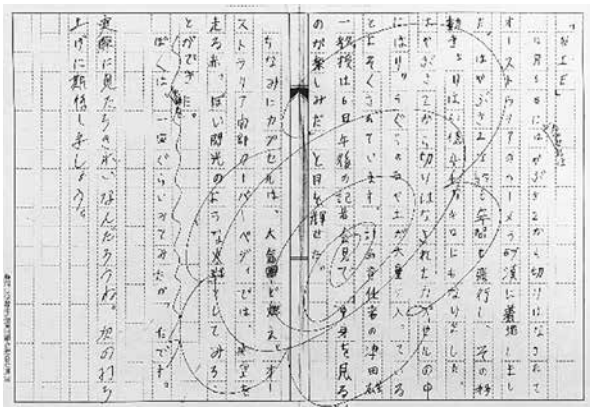
③情報をまとめる材料

５年生の社会では、北海道と沖縄県の特色を生かした暮らしについて学んだ。子どもたちは、それぞれ興味を持った方を選択し、２つの地域の暮らしについて新聞にまとめた。毎日小学生新聞などをお手本にし、より良い新聞を作るには、興味を引く写真やインパクトのある見出しで、読者が読みたくなるようにしたり、簡潔な見出し、レイアウトで内容を伝わりやすくしたりすることを挙げ、自分たちの新聞づくりに活かした。

【６年生の実践】

①新聞から情報を集める。

６年生は修学旅行で小惑星探査機「はやぶさ２」について興味をもった。保護者と５年生に説明するために、はやぶさ２に関する新聞記事から、情報を集めた。子どもたちは小惑星の探査について理解を深め、実りのある発表をすることができた。新聞は必要な情報をより簡潔に正確に伝えるための工夫をしているので、情報を集める手段の１つとして適していると考えられる。



【校内での実践】

①地域の記事を掲示

子どもたちの生活の中に新聞を根付かせるために、毎日、養護職員が新聞に目を通し、西伊豆町に関連する記事を切り取り、掲示した。掲示場所は１階のみんな通る場所にし、子どもが自然と新聞に目が行き、興味関心をもてる環境にした。新しい記事を掲示すると、廊下を通る子どもたちは足を止め、記事を見つめる姿をよく見かけることができた。難しい言葉を理解することが困難な低学年の子どもも、写真があることで「あ、これは〇〇だ」「〇〇ちゃんが写ってる！」「これは何かな」など興味関心をもつことができていた。新聞に掲載された時には、一時的に記憶に残るが、いつの間にか忘れてしまうものである。掲示して残すことで、自分たちの地域の良さや新しい発見、学校での出来事や友達の頑張りなどをいつでも振り返ることができた。

３．ま と め

（１）児童の感想

・写真でカルタを作ったり、写真を見たりして楽しかった。
・季節によって写真が違うから楽しかった。
・新聞の４コマ漫画を見ておもしろかった。
・おもしろい動物や花の写真の記事を切り取って楽しかった。
・新聞の書き方でリードがあることを知った。
・新聞作りを通して、勉強のまとめができた。
・１枚の新聞の中にたくさんの情報があることが分かった。
・いろいろな情報が載っていておもしろかった。
・人によって考え方が違うことが分かった。

（２）先生方の感想

・１年生では、写真を使って季節を感じさせたり、文作りをさせたりするのに有効だった。また、新聞からカタカナ見つけをして、カタカナで表記するものを知る機会を作ることができた。
・お気に入りの写真を切り抜いたり、それをもとに手作りカルタを作ったり、創作のお話を作ったりするなど、楽しく取り組めたと思う。
・新聞の４コマ漫画を子どもたちに紹介した。そのことで、子どもたちが漫画を創作する楽しさを知る機会となった。

・高学年では、国語や社会科、総合的な学習の時間に資料として活用したり、それを読んでの意見文を書いたりした。資料の読み取りの指導、記述力を向上させる機会となった。
・ＮＩＥに取り組み、子どもたちは自分の思いを伝える力がついてきたと感じた。

（3）成　果

①自分の思いが書き表せるようになった。

何を書くとより相手に伝わりやすくなるのかを考えて、自分の思いを書けるようになった。どの学年も文章に自分の思いを書いて、周りの友達へ伝えられるようになった。

②必要な情報を取捨選択できるようになった。

自分の必要とする情報を選び、自分で必要なことを考えられるようになった。

これら２つから、新聞を活用することによって、子どもがインプットした情報をアウトプットするようになったということが言える。情報伝達力向上の上で一番重要視される力であり、新聞を活用した取り組みが大きな効果を発揮した。

（4）課　題

①新聞記事の選定の難しさ

どの記事が使えるのか、どういった選び方をしたらいいのかなど、選定が難しかった。

②教材や付けたい力に合わせた活用場面の吟味

各教科の内容を把握した上で、事前に横断的なカリキュラムマネジメントを行い、常に頭に入れて展開していく必要がある。

③活動継続のための新聞の確保

ＮＩＥの実践期間中は、多くの社の新聞を手にすることができた。しかし、現状では、多くの新聞は学校になく、新聞をとっていない家庭が多い。今後も継続的に新聞を活用した学習を進めるには、より多くの新聞の確保が必要である。

4. 終わりに

３年間のNIE実践校としての活動が終了した。最初は、何からしていいのか戸惑いばかりで、新聞を使った授業を行うことは、雲をつかむような話であった。しかし、少しずつ実践を積み重ねていくことで、ＮＩＥの面白さを実感することができた。子どもたちも新聞を手にする機会が増えたと同時に、たくさんの情報が載っているなどの新聞の良さにも気づくことができた。

ＮＩＥの実践を通して、子どもたちに情報をインプットし、アウトプットさせる力をつけられたことは、とても素晴らしいことであった。今後も、学習の中に新聞を取り入れることで、子どもたちの学びがより豊かになっていくように活動していきたい。

自分の考えを深め、広げるNIE

伊豆の国市立韮山南小学校　　山本　順也

１．はじめに

（１）テーマ設定の理由

本校は、平成31年度、令和２年度にＮＩＥの研究実践指定校になり、子供たちの手の届く場所にたくさんの新聞を置くことができる環境が整った。「新聞には、詳しい情報を得ることができる。」「時間をかけて何度も読み直すことができる。」などの良さがある。整った環境の中で、新聞の良さを生かしていくことができれば、世の中の出来事に対する関心を高め、自分の考えを深めたり、広げたりしていけるのではないかと思い、「自分の考えを深め、広げるＮＩＥ」研究テーマを設定した。

（2）新聞の置き場所と整理方法

平成31年度は、子供がいつでも新聞を手にとって見ることができる環境を第一に考え、子供がよく通る２・４・６年昇降口と、１・３・５年昇降口に新聞コーナーを設置した。期間を10月から１月とし、４ヶ月に集中することで、いろいろな新聞を読めるようにし、子供の関心を高めようと考えた。

令和２年度は、いつでも新聞を見ることができる環境を整えられると良かったという反省を生かし、年間を通して新聞が読める計画を立て、６月から３月まで新聞コーナーを設置できるようにした。

２・４・６年昇降口

１・３・５年昇降口

２．実践内容

（１）委員会による新聞紹介

平成31年度は、広報委員会の子供たちが、気になる記事を選んで原稿を書き、給食時に紹介する活動を行った。令和２年度の「委員会による新聞紹介」は、本校教員が学校生活の様子を掲示し、そのことを紹介する活動を行った。

階段の壁には、本校教員が、学校生活の様子を紹介したものを掲示している。学校が再開された時の「喜ぶ顔が見たい。」という見出しの前では、子供だけでなく、職員も足を止めて見ている姿があった。

コロナ禍での学習発表会、子供たちが考えたスローガンは「Let's try 学べることに感謝して」

の見出し「やってみよう」の前でも、たくさんの子供が記事を見ていた。人を惹き付ける見出しの効果を実感できた様子だった。

図書委員の子供たちは、図書室に気になる記事を選び、感想を添えて紹介した。

図書室にある新聞紹介コーナー

（2）先生によるおすすめの記事の掲示

いろいろな出来事に関心をもてるよう、ジャンルを選ばず、教員が興味をもった記事に感想を添えて紹介した。令和２年度は、子供と双方向になるように、近くにふせんを置き、記事についての感想を書けるようにした。低学年はピンク、中学年は黄緑、高学年は水色のふせんを用意した。

新聞記事の紹介コーナー

「レジ袋　有料化開始」の記事を紹介すると、子供たちからたくさんの感想が寄せられた。特に人気があったのは、クイズにして紹介するやり方で、「動物の足跡は何か。」「ちびまるこちゃんの作家であるさくらももこさんが飼っていたかめは今どこにいるのか。」という問題を解こうと、多くの参加があり、新聞の記事に注目していたことが分かった。

（3）５年生の取組

①朝の会でのスピーチ

気になる記事が掲載された新聞を子供が持って来て、どんなことがあったのか、その事についてどう思ったかを、朝の会のスピーチで友達に伝える活動を行った。選んだ記事は切り抜いて学級の新聞コーナーに貼り、何度も読み直すことができるようにした。

②平成31年度　社会科「情報産業とわたしたちのくらし」

・新聞の番組表を使って、知る番組と楽しむ番組に類別する活動を行い、曜日や時間帯によって番組の構成が異なることに気付くことができた。他にも、２つの新聞社を選んで、新型コロナウイルスの記事を読み比べる活動を行った。「中国感染力強まった」「武漢の日本人に帰国

便」、２つの見出しを見比べた子供たちは、「こっちは、中国が発生源でこわい感じがするけれど、こっちは日本人を守りたいことが伝わってくる」と発表し、伝える側の意図で、見出しや構成が異なることに気付くことができた。

③令和２年度　国語「新聞の情報を読み取ろう」

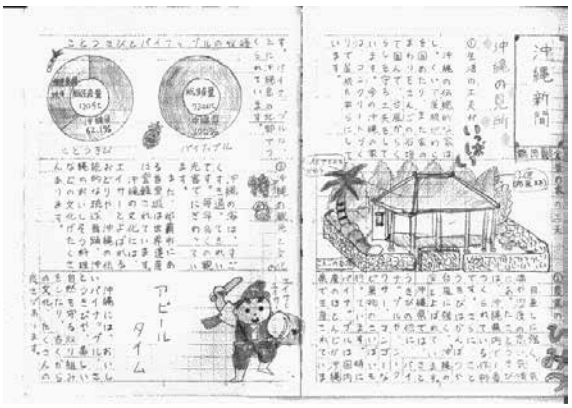
スクラップシートを作る活動を行った。５年生の子供たちは４年生の時に、いちごづくりを行っているので、興味をもって取り組む事ができるよう、近隣の学校で同じような活動をしている記事を取り上げた。

スクラップシートを作りながら、いちごづくりを進めている人たちの願いや、同年代の子供たちの気持ちを知り、視野を広げることができた。

作成したスクラップシート

④令和２年度　社会科「あたたかい土地のくらし」

子供が主体的に取り組めるように、単元を通してのテーマ「沖縄アピール新聞を作ろう」を設定したことにより、新聞を作るために、沖縄の産業や気候について、詳しく学ぼうとする姿が見られた。



沖縄アピール新聞

⑤令和２年度　社会科「情報産業とわたしたちのくらし」

「あたたかい土地のくらし」の実践と同様に、子供が主体的に取り組めるように、単元を通してのテーマ「テレビ局の名プロデューサーを目指そう」を設定した。「どのような意図で番組の構成が考えられているのか」と、調べる目標を明確にしたため、昨年度より、意欲的に取り組むことができていた。

＜取組の成果＞

新聞に対する関心が高まり、自学で新聞の内容を取り扱う子が増え始めた。そのような取り組みを紹介し、世の中の出来事に関心が高まるように心掛けるようにした。エッセーを読み、あいさつの大切さを見直した子供もいて、考えを深めていることが分かった。

（４）平成３１年度の各学年の実践報告

４組

新聞のレイアウトを学び、壁新聞作りを行った。

１年部

先生方の記事の掲示や、新聞記事からピックアップしたものを、朝の会、帰りの会で紹介した。また、昼の放送で記事を紹介した際、補足説明をした。

２年部

季節の草花を使った遊び方の記事を生活科で紹介した。図工「新聞となかよし」では、新聞を使った造形活動を行った。

３年部

国語「見てきたことを新聞にまとめよう」の学習で、新聞作りの際に新聞の見出しの書き方や割り付けの仕方を例に使った。社会科や総合で学んだことを新聞にまとめる活動で、新聞の構成を参考にした。

４年部

社会科「特色ある地域とわたしたちのくらし」や総合の調べ学習で、新聞作りを行い、見出しの効果や使われ方を考えて、分かりやすい新聞にした。

６年部

新聞の写真をタブレットで撮って、大型 TV に映してのスピーチできるようにしたり、静岡新聞日曜版企画「トークバトル」に応募したりした。

３．実践の成果と今後の課題

（1）成　果

〇先生によるおすすめ記事に感想を書けるようにしたことにより、自分なりの考えをもつ子を増やすことができた。レジ袋有料化の記事に、「これからは、マイバッグを持ち歩くようにしたい。」など感想がたくさん寄せられ、考えを深めることにもつながった。

〇新聞を生かした授業を充実させていけば、実践でも報告したように、世の中の出来事に対する関心を高め、考えを深めことができると分かった。

〇自学ノートを見ると、新聞の内容について考える子供が増えていることが分かる。いろいろな出来事に目を向けられるようになり、考えを広げていけるようになってきた。

（2）課　題

・関心が高まれば、成果として表れることは実感できたが、関心を高めるために、児童が気になりそうなページを意図的に開いておくなど仕掛けをしても、自分から新聞を読もうとする子はまだ少ない状況である。

・人を惹き付ける見出しや写真の効果を実感している子供たちなので、授業で計画的に取り扱うようにすれば、考えを深め、広げられるはずである。授業内容をいかに充実させていくかが、今後の課題になってくる。

新聞で学びが繋がり、自分ごととして考えていくよろこび

静岡市立清水飯田小学校　　小川　訓靖

１．はじめに　～本校における新聞活用の位置づけ～

本校は、「よろこび」＝「目標達成から生まれる自信」と位置づけ、重点目標「よろこび　つたえよう」の実現に向け、子どもたちの内側から湧き出る「よろこび」を大切にしている。

学習面においては、「できるよろこび」、「わかるよろこび」を大切にし、「できた・わかった」を実感できる具体的場面の一つに「学びが繋がっていくよろこび」があると考える。

「あの時の学習や生活経験は、こういうことだったのか…」など、知識と知識、体験と知識、教科と教科、既習事項と社会事象等が繋がり、自己の中で再構築されたり、系統化されたりしていく「よろこび」を味わう場面を増やし、繋がった瞬間を大切にしていく過程で新聞記事から考えることも含め、本物の知識獲得・語彙力の向上、そして、幅の広い視野での豊かなものの見方の育成に繋がっていくと考えている。

このような子どもの姿をめざして、約３年半、日常生活の中で、学びを再構築・系統化する一助や、自分ごととしてものごとを考える資料・ツールとして、日常生活の中で積極的に新聞を活用してきた。

２．実践内容

①**情報をかみ砕き広げる手立て**　～知識・語彙力の向上　→　読解力・要約力を養う～

平成29年度後期から、放送委員会とタイアップし、昼の放送で「気になる記事特集」を実施した。

月に１度行われる５・６年生の委員会の時間が、「１カ月分の新聞から気になる見出しを探し→読み→事実を要約してまとめ→自分の思い・考えを書く」充実した時間となった。知識・語彙力の向上だけでなく、読解力・要約力をつけることをねらった。放送委員は、要約の際、低学年にも分かりやすい記事になるように相手意識をもって表現をかみ砕き、簡易的な文章作りに努めた。放送委員以外の児童には、給食中に耳から要約された新聞記事が情報として入る。そして、そこで使用された記事や写真は、放送室前の「ＮＩＥ掲示板」に掲示した。

放送委員にとっては、自分で記事を見つけ要約し伝えることで、記事に親近感や愛着を覚え、その記事が、自分ごととして、学習と繋がっていくこともあり、より学びが深まった。また、放送を聞いている児童は社会に興味をもつきっかけとなった。

②**今週のＮＩＥ！週に１度のプチ読書タイム**　～自主勉強への広がりへ 多様な価値観を知り本物の知識獲得へ～

「今週のＮＩＥ」と称し、毎週１回、共通の記事を読み、要約とその記事に対する自分の考えを書きまとめることを行ってきた。記事は、社会科・理科等で学んだ事項・学校行事・社会情勢等、その時々の身近な話題を選びタイムリーな話題提供で興味を繋いでいった。朝の学習時間だけでなく、家庭学習としても取り組み、各家庭で記事について家族に伝える姿も多く見られ、対話のきっかけとなった。記事から知った事実やそれについて考えたことを家族に伝えることで記事の内容や記事に対する自分の考えがより明確になっていった。

共通の記事を用いて考えを交流することを繰り返していくうちに、授業で学んだこととの関連記事や、気になる社会情勢について、自主学習でスクラップすることが日常的になってきた子が増えてきた。

③ **授業での活用** ～さり気なく仕掛け → 繋ぎ → 自分ごととして考える学び～

総合的な学習の時間では、「飯田村では、水は宝であるから粗末に扱ってはいけない。」という先人の言葉を学びのスタートとし、「なぜ水は飯田にとって宝なのか～宝の意味を探る～」という単元を年間通して行ってきた。

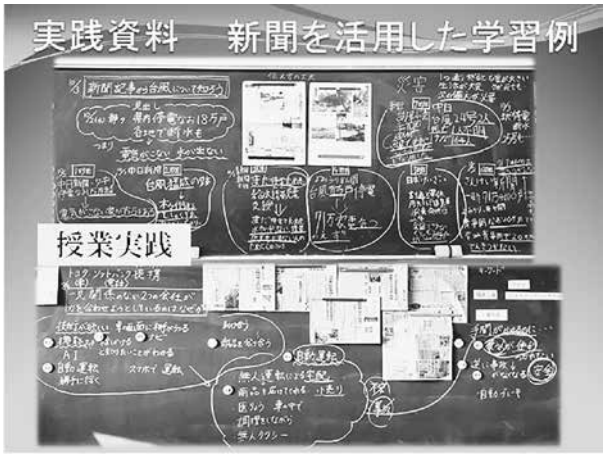
１年間学んできた中で、子どもたちが行き着いた「宝の意味（中身）」は、下記の４つ。

- かつて水田が広がる米どころでありながら、大きな河川もなく、水の確保に悩まされてきた地域の歴史から。
- 水不足解消のためにため池を造ったり、巴川から水を引いたりしてきた先人の努力こそ宝。
- 田んぼの水として利用していた山原川は、今でもホタル等の生息する生き物が豊かな川だから。
- 山原川で、泳いだり、魚を捕まえたりと親しんできたかつての子どもたちにとって宝。

これら４つの事実を宝の中身と位置付けるまで、米農家の方に直接お話を聞いたり、過去の資料で調べたり、実際に山原川に入って生物調査をしたりと１年間、様々な学びをしてきた。

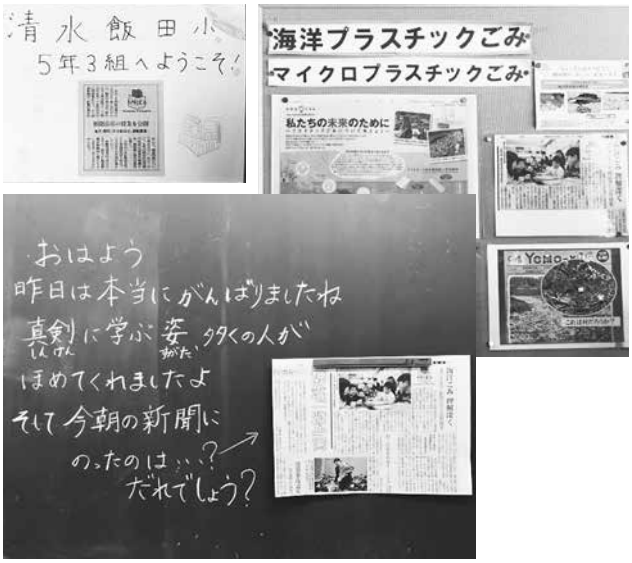
調査を通して、宝の水である山原川に現在はごみが多いことに気づき、問題視し始めた子どもたちに、教員が「海洋プラスチック」に関するいくつかの新聞記事を提示することで、体験と新聞記事に書かれている事実が繋がり、地域の川から世界的な環境問題へと視野を広げていくきっかけとなり、自分ごととして考えていくことができた。

その他　授業での活用例・・・社会科、理科等、様々な授業で研修テーマと関連し、子どもたちの知的好奇心を揺さぶったり、学んだことを社会事象などと繋げ、再構築・系統化したりする資料として新聞の活用を試みた。



④ **新聞記事を学校中にさり気なく**

朝の黒板によるメッセージにさり気なく新聞記事を加え、新聞記事で１日が始まるようにした。また、養護教諭や学校司書の協力も得て、保健室や図書室に新聞を掲示したり、委員会で活用したりするなど、校内のあちらこちらにさり気なく新聞がある生活を試みた。また、職員室の休憩スペースや入口にも、教育に関するタイムリーな記事を置いたり、ワークシートを紹介したりすることで、教師間での話題・議論の提供の場にもなった。



３．成果と課題

○　点と点が繋がっていく「よろこび」

「あの時の学習や生活経験は、こういうことだったのか…」など、知識と知識、体験と知識、教科と教科、既習事項と社会事象等が繋がり、自己の中で再構築されたり、系統化されたりしていくよろこびを新聞を用いて経験することができた。始めは、教員側からの記事の提供が多かったが、次第に自主学習へと広がり、授業で学んだこととの関連記事や、気になる社会情勢について、自らスクラップし、要約や考えを書くようになってきた。

朝のドリルタイム等に、ペンを片手に記事に線を引きながら読み、要約し、それに対する自分の考えを書く学びの繰り返しは、国語学習に繋がった。特に説明文の学習では、段落の要点まとめ→文章の要約→筆者の主張に対する自分の考えをまとめる活動に集中して取り組めるようになり、全員が書き上げることができるようになった。

○　知ったことを伝える「よろこび」。　記事を相手に伝えることで親近感・愛着そして自分ごとへ。

社会で起こっていることに興味・関心をもつ子が増えた。「この前、新聞に出ていたよね。」という言葉が学校生活の中で子どもたちからよく聞かれるようになった。例えば、５年生で水産業の学習をした時、「日本近海でサンマが不漁」という記事を何度かとりあげた。保護者から、「記事をもとに日本の水産業について真剣に語ってくれた。」などの感想をいただいた。自分で記事を読んで、まとめるだけでなく、家でも記事を読み、自分の考えをまとめる活動を繰り返したことで、新聞や文字への抵抗感が薄れ、記事に親近感を抱き家族や友達に語るようになった。

対話を通して、１つの事象についてさらに深く考えることで、本物の知識・語彙の獲得していった。そして、今後は、幅の広い視野での豊かなものの見方の育成に繋がっていくと考えている。

○　授業などにおいて、日頃から記事を使ってさり気なく、意図的に仕掛ける姿勢の大切さを実感した。

子どもたちが、新聞記事を読むことで、既習事項、知識、生活体験と繋がっていくよろこびを間近でみることができた。これこそ、学習における新聞活用の魅力の１つであると考える。今後も、日常生活の中で無理なく、さり気なく新聞を取り入れ、子どもたちが「学ぶよろこび」をあじわえる資料・ツールとしての活用を心がけたい。

４．最後に

テレビやインターネットの「速報」により、トピックとして事件やできごとの概要はすぐに知ることができる世の中となった。しかし、「新聞で記者はどう表現しているのか。」じっくり読み直したり、記者の見出しの表現などの書きぶりを楽しんだりできる新聞の良さや、事実に基づく正確さを今後も伝えていきたい。

そして、自らも新聞に親しみつつ、「主体的に学ぶ素材として新聞記事をどのように教材化していくか」など、子どもたちに必要感のある課題を提供し、自分ごととして主体的に考えていく素材として、新聞記事の教材化に努めていきたい。

みんなで　いつも取り組むNIE教育

吉田町立自彊小学校　　大柳　知穂乃

１．はじめに

本校は昨年度より、ＮＩＥ教育実践指定校として実践を積んできた。本校の校内研修は、限られた職員の研究授業を柱に置く研修スタイルではなく、日常からいくつかの共通実践をみんなで行う研修スタイルをとっている。ＮＩＥ教育についても、担当任せではなく、どの学級でも、日常的に取り組むスタイルをとっていこうと考え、「みんなでいつも取り組むＮＩＥ教育」をテーマにスタートした。

本校の二年間で積み上げた二つの実践を紹介する。一つ目は、「みんなで」「同じ方向を向いて」取り組んだ実際の授業実践として、校内研修とNIE 教育の一体化である。二つ目は、授業以外の実践として、同一歩調で行う日常的な取り組みである。

２．実践研究の概要

（１）校内研修とＮＩＥ教育の一体化

①校内研修とＮＩＥ教育のつながり

まず、校内研修とＮＩＥ教育を別のものと捉えるのではなく、校内研修で目指す授業や子どもの姿に迫る一つの手立てとして捉え、研修構想の中に位置付けた。本校の目指す授業は、「対話を通して、より客観性のある考えをつくる授業」、目指す子どもの姿は、「根拠をもって自分の考えを語る子」「友達と考えを分かり合いながらよりよい考えに練り上げる子」である。研修の取り組みにＮＩＥ教育を効果的に絡めていくことによって、これらに迫っていこうと考えた。（資料１）

資料２は、研修構想とＮＩＥ教育の各取組のつながりを図に示したものである。（資料２）枠内は、本校で取り組んでいるＮＩＥ教育の主な取組である。新聞を活用することによって、語彙が増え、思考力が高まったり、新聞の内容を根拠として考えをつくったりする効果があると押さえ、対話の充実に寄与するものと考えた。

資料３は、４年生の年間育成計画表・道徳科別葉である。４年部では、社会科「ごみはどこへ」の単元で使える記事はないかというアンテナをもって、新聞を読み、記事選びをしてきた。どの学年部も、普段の授業をしながら記事を探すことは難しいため、事前に新聞を活用する重点単元や教科を絞り、目星をつけておくことによって、効果的で、実現可能な授業づくりにつなげた。

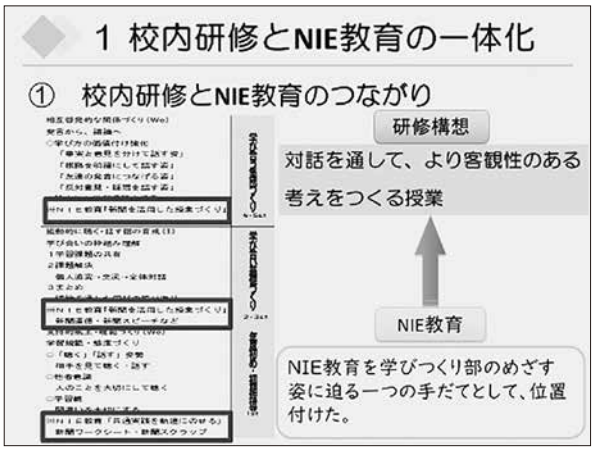
令和元年度は､道徳科での新聞活用学習を進めた。

①道徳的価値を自分事として考えやすい

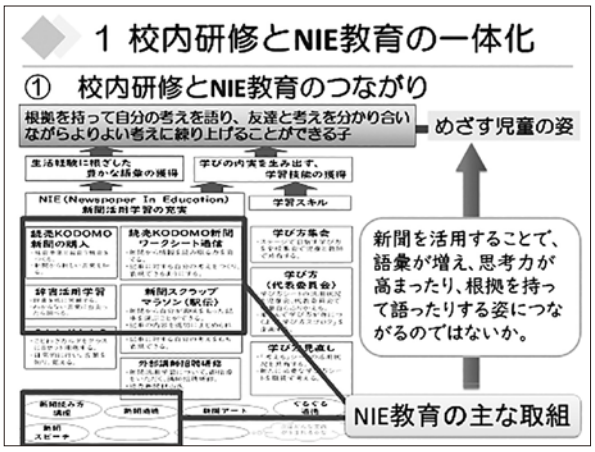
②教材の入れ替えが自由で、実践しやすい

③一つの記事を教材化すると学年部で共有できるという理由からである。

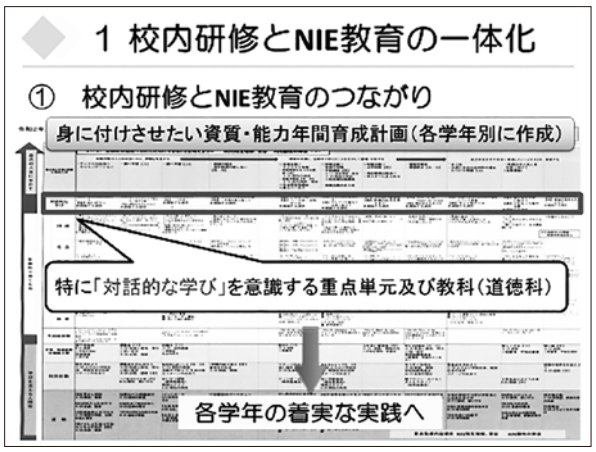
資料１



資料２



資料３



本年度は、各教科での新聞活用学習にチャレンジした。

①学習内容を自分事として考える補助教材になる

②記事をもとに事実を根拠として考えることができるという理由からである。

職員の共通理解を得て、各学年の着実な実践を可能にし、みんなで取り組むようにした。

②新聞を活用した授業実践

ア．道徳科の実践（令和元年度から）

令和元年度、道徳科の授業実践するにあたっての取組の方法は、

①使えそうな記事をストックしておく

②新聞記事と学習指導要領の内容項目を見比べて、指導案作成をする

である。校内研修の中に「新聞道徳指導案作成研修」を位置付け、全職員で行った。様々な記事を活用して実践することを通して、新聞を使って得た情報を根拠に、自分の考えをつくり、対話をする道徳の授業が日常的なものとなった。

１年生は「自分の目標に向かって、一生懸命努力しようとする」の観点に合わせ、夢や希望をもてるように、授業の終末で記事を活用した。子どもたちは、新聞記事を読み、努力して夢を叶えている人が身近にいることを知り、振り返りで「ピアノの先生になりたいから、ピアノの練習を毎日頑張りたいよ。」という感想があり、自分を見つめ直す手立てとして有効であった。

４年生は、「お互いの苦手なところを自分事として想像し、思いやり、進んで親切にすること」の価値に迫るために、発達障害をもつ子が特別席でＪリーグを観戦する記事を扱い、特別席で観戦をしていることは特別なのかを考えさせた。それぞれに得意、苦手があることを捉えやすいように、記事を活用した。振り返りで、「特別席はASDの子に対する思いやりじゃないかな。」という多面的、多角的に考える姿が見られた。

５年生は、「自律的で責任のある行動を心がけよう」という価値に迫るために、「ネットに悪口悩んで自殺か」の新聞記事を扱い、「SNSとどうやって付き合っていったらいいのだろう」を考えた。SNSの良い面と悪い面の両方に触れ、どう

使うべきか、なぜ人を傷つける書き込みをしてしまうかを考えることができた。子どもたちからは「始めはSNSは悪いと思っていたけど、よい使い方をすればという発表を聞いて使い方に気を付けて利用したい。」という感想があり、生活経験と照らし合わせて考えるために有効であった。

第５学年　道徳科学習指導案

授業者　阿井　雄大
場　所　５年１組教室

１　主題名　善悪の判断、自律、自由と責任
教　材　ＳＮＳとどうやって付き合っていったらよいのだろう
新聞「ネットに悪口 悩んで自殺か」読売KODOMO新聞
２　内容項目の指導の観点
自由を大切にし、自律的に判断し、責任のある行動をすること。
＜Ａ 主として自分自身に関すること（１）善悪の判断、自律、自由と責任＞
３　本時の授業
(1) 本時のねらい
日常生活でＳＮＳを使用する機会が増えている児童が、新聞記事を読んで感想を伝え合ったり、ＳＮＳは悪いのか否かを議論したりすることを通して、自由に伴う責任の大きさについて多面的・多角的に理解し、自律的で責任のある行動を心がけようとする意欲をもつ。
(2) 本時の展開

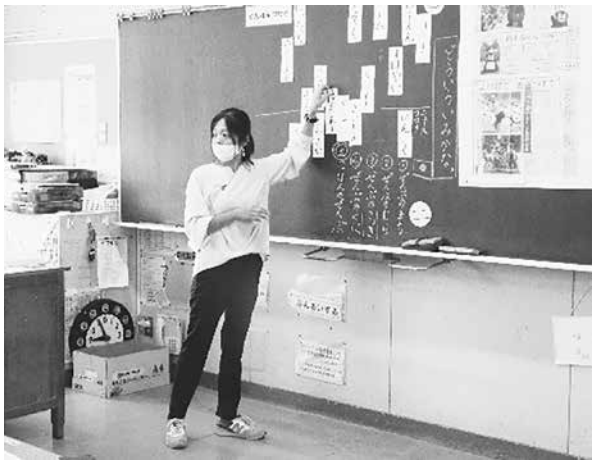
時間	○主な学習活動　・予想される子どもの表れ	・留意点 ☆評価
10分	自分が行動を決める時に大切にしたいことは何だろう。 ○木村花さんの記事を読んで、感じたことを話し合おう。 ・かわいそう。自殺するくらいだから、相当辛かったと思う。 ・匿名だからといって悪口を書き込むなんてひどい。 ・ＳＮＳがなければ自殺しなかったかもしれない。	・木村花さんがネット上の悪口に悩み自殺してしまったことを伝える記事を読む。（記事１）
25分	ＳＮＳは悪い？それとも悪くない？ ＳＮＳは悪い：・人の気持ちを考えないで書き込む人がいる。・たった一言で人を死に追い込んでしまう。 どちらとも言えない：・どう使うかによって変わる・花さんのようにＳＮＳに苦しめられる人もいれば、救われた人もいる。 ＳＮＳは悪くない：・悪口を書き込む人が悪い。無責任。・ＳＮＳに救われた人もいるって テレビで見たことある。 ○ＳＮＳを人のためになるように使っている人もいる。どんな気持ちから悪口を書き込んでしまったのだろう？ ・つられて軽い気持ちで書き込んだと思う。 ・自殺するなんて考えないで冗談のつもりで書き込んだと思う。 ・匿名で自分が書き込んだことがわからないから。 ○あなたは軽い気持ちで行動してしまったことはありますか。 ・先生が見てないからって廊下を走ってしまった。 ・友達につられて友達の悪口を紙に書いてしまった。	・ＳＮＳが児童にとって身近なものであることを感じさせるために、ＳＮＳについて確認し、アンケートの結果を示す。 ・議論しようという気持ちが高まるように、記事を読んだ感想を伝え合う。 ・スキルカード「多面的・多角的に考えます。」を提示し、いろいろな視点から考えるように促す。 ・自律的で責任のある行動が大切であると考えるきっかけとなるように、ＳＮＳの善さに触れた発言を取り上げ、議論を焦点化する。
8分	○今までの自分を振り返り、これからの自分について書いてみよう。 ・今まで軽い気持ちで行動して友達に迷惑をかけてしまうことがあった。ＳＮＳと同じで、軽い気持ちで行動するのではなく、自分できちんと考えてから行動するようにしたい。 ・自由だからって悪口を書き込むのは無責任という○○さんの考えが印象に残った。自由だとしても、いけないことはいけないと判断して、責任のある行動を心がけていきたい。	・ＳＮＳに限らず、どんな場面でも自分で判断し行動することが大切だと気づくように、自分の生活を振り返る。 ☆今までの自分を振り返り、これから自律的で責任のある行動を心がけようとする意欲をもっている。【振り返りの記述】
2分	○教師の説話（ＳＮＳの善さを扱った記事の紹介：記事２）	

４　新聞活用の意図
・新聞を道徳の価値の内容項目に照らし合わせて教材化することで、道徳的価値を自分事として捉えたり、新聞から得た情報を根拠に多面的・多角的に考えたりすることにつながると考える。

イ．各教科でも新聞活用にチャレンジ（令和２年度から）

令和２年度は道徳科と同様、学習指導要領の身に付けさせたい力を押さえた上で、記事の内容を選定し、授業での扱い方を考えていった。

１年生では、国語「新聞の言葉を使って文を作ろう」を実践した。新聞記事の中から聞いたことがある言葉や知っている言葉を取り上げた。その言葉の意味について、子供たちの生活経験をもとにして対話活動を行ったところ、自分の経験と結び付けて活発に考えを伝え合うことができた。また、教師が国語辞典で意味を調べ伝えることで、何となく聞いたことのある言葉の意味を確実なものにすることができた。終末では、「すばやい」「励まし合う」を使って文作りをした。子どもたちから「言葉の意味が知れて良かった。」という感想があり、語彙を増やす手立てとして有効であった。



４年生の社会科の実践では、ステイホームでゴミが増えた記事や清掃員が感染リスクに直面している記事を扱った。子どもたちにとって、「なぜ今ごみを減らすべきか」を考えさせるタイムリーな話題となり、現代的な課題を捉えることができた。そして、ごみの減量化のために、「紙マスクじゃなくて布マスクをすることでゴミを減らす」や、「マスクから感染リスクがあるからゴミを分別することが大切だと思った」という意見をもった。課題をより自分事として捉え、これからの生活で何ができそうかという視点で考えることができた。

第４学年　社会科学習指導案

授業者　森　祐介
場　所　４年２組教室

１　単元名　ごみ減量宣言！～自分たちにできること～
毎日小学生新聞【2020.5.19】、朝日新聞【2020.4.23】
２　本時の授業（13／14時間）
(1)　本時の目標
ごみを減らすために自分たちにできることを考えた児童が、ステイホームによってごみが増えている記事や清掃員が感染リスクに直面している記事を読み、自分の生活と関連付けたり、新しい生活様式の中で自分ができることを考えたりすることを通して、ごみ減量宣言をする。
【思考力・判断力・表現力等】〈(2)イ-(イ)〉
(2)　本時の展開

時間	○主な学習活動　・予想される子どもの表れ	・留意点　☆評価
2分	○ごみの量を減らすために、市・町で働く人はどんな取り組みをしているのかな。 ・レジ袋をもらわないことで、ごみそのものを減らしている。 ・スーパーでは、食品トレイや紙パックなどを資源回収ボックスで分別し、再利用できるようにしている。	・ごみを減らす取組（３Ｒ）を通して、ごみの量が少なくなってきていることを確認する。
15分	○新聞記事を読み、気づいたことやわかったことを発表しよう。 記事１：ごみ収集、感染の危険も ・ステイホームで家庭ごみの量が1.5倍に増えている。自分の家もそうだった。 ・使用済みのマスクやティッシュは、感染の危険があって怖いな。だから、教室でも、使用済みのマスクやティッシュを分けて捨てているんだ。 ・１日４回の収集が、７回になり、清掃員さんの負担が大きいな。 記事２：マスクポイ捨て、潜わ感染リスク（見出しと写真のみ） ・マスクのポイ捨てが増えていて、悲しいな。わたしは、捨ててはいないけど、教室に落としてしまったことがあったな。 ・そのままマスクを捨ててしまったことがあったけど、接触感染の恐れがあるから、気をつけなきゃいけないな。 ・拾うときには、ゴム手袋が大切だな。 T：ステイホームの影響で家庭ごみの量が増えていたよ。そして、清掃員さんはもちろん、私たちも感染リスクに直面しているから怖いね。	・記事１の内容をつかむために、気づいたことやわかったことに線を引かせる。 ・記事１（清掃員の苦労）、記事２（感染リスク）に目が向くように、清掃員の苦労と感染リスクを結び付けて板書し、現代的な課題をおさえる。 ・ステイホーム中の家庭ごみの現状と新しい生活様式を結び付けて考えられるように、スキルカード（関連付ける）を提示する。
20分	○こうした状況下で、自分たちにできることを考えよう。 ごみの量を減らすために今の生活の中で、自分たちにできることって何だろう。 【自分でできること】 ・使用済みのマスクを捨てる時には、別の袋に入れてから捨てる。 ・清掃員さんの苦労を減らすために、布マスクや何回も洗えるマスクを使う。 ・ごみ袋は、しっかり縛って封をした方がいいな。 【家族の一員としてできること】 ・ごみを減らしていくためには、おうちの人にも働きかけた方がいいな。	・自分のごみ減量宣言をする際に、今日の学習でわかったことと今後の自分たちの行動が整理しやすいように、話型を示す。
5分	○今日、わかったことをもとに、自分のごみ減量宣言をしよう。 今日の学習でわかったこと →（つなぎ言葉）→ これからの自分の行動 ・新型コロナウイルス感染症の影響によって家庭のごみの量が増えていることがわかった。 →（だから）→ ・マスクを捨てる時には、そのまま捨てずにポリ袋などに入れて口を縛って捨てよう！	☆話し合ったことをもとに、新しい生活様式の中で自分なりにできるごみの減量化について考えている。【発表、ノートの記述】

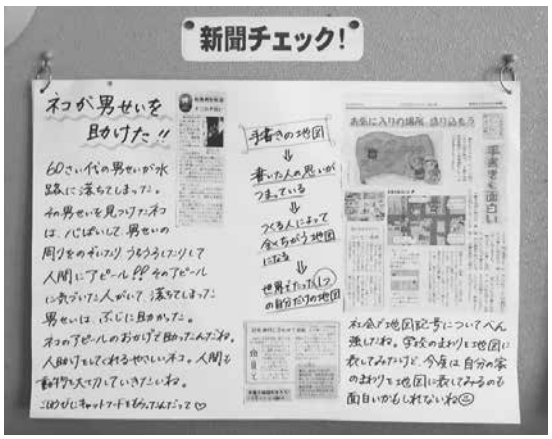
３　新聞活用の意図
・ステイホームの影響で家庭のごみの量が増えたというタイムリーな課題を題材として扱ったことは、既習事項と現代的な課題を関連付けて、自分事として捉えることにつながると考える。
・４年生の児童が複数の記事を読み、必要な情報を収集する活動を経験することは、日常的に新聞に親しんだり、興味をもったりすることにつながると考える。

（2）同一歩調で取り組む日常的な取り組み

①全学年共通の取り組み

まず、新聞を身近に感じる環境づくりをした。読売子ども新聞と、毎日小学生新聞を各学級に配架した。また、全学級数の新聞ラックを購入し、いつでも新聞にふれることができるようにした。子ども新聞は、低学年の児童にも読みやすく、楽しんで読む姿が見られた。

また、教室には、各担任の創意工夫で、新聞コーナーを設置した。学級児童に合う記事を探して説明を入れながら掲示したり、学習内容に合う記事を掲示したりした。



また、楽しく新聞を読むことで興味をもつようになるのではと考え、朝の学習に「新聞ワークシート」を取り入れた。本校では、「読売子どもワークシート通信」を活用した。これは、低、中、高学年の発達段階に合わせて、写真や見出し、リード文が分かりやすく編集され、いくつかの問題がついているワークシートで、子どもたちからは「写真が大きくて、何のことが書いてあるか知りたくなる」という感想が寄せられたことから、新聞への関心を高めることに繋がったと考える。

②発達段階に応じた新聞活用の工夫

ア　低学年の実践…チョキチョキアート

新聞に親しみを感じ、新聞を手にとってみたいという気持ちを育むために行った。新聞切り絵アーティストのマスダカルシさんを招聘(しょうへい)して、新聞チョキチョキアートを指導していただいた。子どもたちは、始めは写真をそのまま切って、作品にしようとしていたが、アドバイスをもらううちに写真の一部を動物の体に見立てて作品を作る姿が見られた。子どもたちは、「新聞の写真の色がきれい」「写真から絵ができるなんてすごい」「もっとやりたい」など、新聞と関わる楽しさを存分に味わうことができた。

イ　中学年の実践…新聞スピーチ

児童それぞれが興味のある記事を選び、伝え合うことで互いに情報を共有できるのではと考えた。当番が輪番で選んだ記事を要約し、考えを伝

えた。自分が素通りしてしまうような記事でも友達は興味をもって選んでいることがあるため、当番が選んだ記事を学級で共有することで社会を見る視野が広がるようになった。子どものアンケートから「スピーチをやるようになってから、いろんな記事を見るのが楽しくなった。」「友達が選んだ記事は自分が選ばない内容で面白い。」といった感想があり、手ごたえを感じている。

ウ　高学年の実践…新聞スクラップ

社会に対する視野を広め、情報を整理する力を付けるために行った。週に１回、家庭学習として行っている。やり方は、

①新聞記事を選び、スクラップブックに貼る
②記事を選んだ理由を書く
③記事の要約をする
④記事への感想を書く

という流れである。新聞スクラップは、塚本新聞店様の御協力をいただき、スクラップブックを無償で必要数、提供いただいた。また、昨年度は、新聞スクラップマラソン考案者の塚本成男様（塚本新聞店専務）からスクラップマラソン講座をしていただいた。塚本新聞店様には、５・６年各学級に毎日１部ずつ静岡新聞を御提供いただいている。新聞を購読していない家庭の子どもは、月曜から金曜までに、学級に配架された新聞から記事を選び、家庭に持ち帰り、スクラップを行った。毎年夏に行われる新聞スクラップマラソンコンクールでは、受賞者が10作品のうち、６作品が自彊小の子どもという結果であった。取り組みを続けることは、記事に親しむ気持ちが高まり、要約することや記事に対する思いをもつことが力になっている結果であるといえる。

３．まとめ

子どもの声

・新聞を読むと知らないニュースがあるから、勉強になる。（２年生）
・新聞道徳をやったとき、内容が面白くて思うことがたくさんあったから、学習に役立っていると思った。（４年生）
・SDG s の視点で新聞記事を見つけ、自分の生活とのつながりを考えることができた。（６年生）

という感想があった。このことから、新聞に興味を持ち、記事から新しいことを吸収したり、自分の生活と結びつけて考えたりすることができた。

職員の声

・自分の身近なものを題材にするので、自分事として考えやすい。
・授業を１から考え、授業づくりをすることは大変だが、授業づくりがおもしろい。
・全てのことにおいて全職員で取り組むという体制がよかった。

という感想が寄せられた。このことから、教師にとって、授業を組み立てるときの材料となり、子どもたちの反応から授業の流れに手ごたえを感じることができた。

このように、ＮＩＥ教育実践指定校という機会をいただいたことで、子どもたちの成長と教師の授業力向上につながった。今後も、「みんなで」、「いつも」同じ方向を向いて、楽しくＮＩＥ教育を続けていきたい。

児童が新聞に親しみ、言語能力を高める取り組み

湖西市立白須賀小学校　鈴木　芳樹
加藤健太郎

1　初めに

本年度から完全実施の小学校学習指導要領では学習の基盤となる資質・能力を言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む）、問題発見・解決能力等としている。この中で、本校では言語能力について注目した。

言語能力に対する本校の児童の実態は、語彙が乏しく、端的に文章としてまとめることを苦手としている。また内容を理解しながら長文を読むことや、自分の思いや考えをうまく言葉で伝えることを苦手としている児童も多かった。本校では言語能力の育成の必要性が大きく表れている。

そこで、これらのことを踏まえて、ＮＩＥを推進することで、言語能力を中心とした児童の資質・能力を効果的に育成できるのではないかと考え、実践を行った。

2　実践内容

（1）学校としての取り組み

ア　新聞に親しむ場を設定

毎日全学級に新聞を配布し、身近に新聞を置くことで、新聞に目を通すことのできる環境を整えるようにした。

身近に新聞があることによって、休み時間に新聞に目を通す児童や、スピーチの資料として切り抜きをする児童もいる。

イ　新聞を活用する場の設定

本校では、毎週金曜日、朝活動の 15 分間に「言葉の時間」を設定している。この「言葉の時間」では、新聞を活用した文章の読み取りや作文、自分の考えを伝え合う対話活動を行うようにした。この「言葉の時間」を「ＮＩＥ推進」の一つの柱とした。

ウ　参考資料を活用しやすくする環境整備

職員室にＮＩＥ関係の資料を置き、教員がいつでも手に取って見ることができる環境を整備した。また、ＮＩＥの資料が公開されているホームページについても、お互いに紹介し共有し合うようにした。

（2）実践事例

実践事例①「お気に入りの記事を紹介しよう」
（低学年）

ねらい

新聞記事からお気に入りの記事を選んで切り抜

き、発表する活動を通して、新聞記事を読むことに親しむ。

進め方

1　新聞記事を読み、気に入った記事を切り抜き台紙に貼る。
2　一言感想を書く。書ける児童は、記事を選んだ理由も書く。
3　記事と感想を発表し、全体で共有する。

児童からは「漢字は読めないけど、いろんなことが載っているし、切り抜きは楽しい。」や「もっと新聞を読みたくなった。」など、新聞を読む、毎週金曜日の朝活動を楽しみにする児童が多くなった。

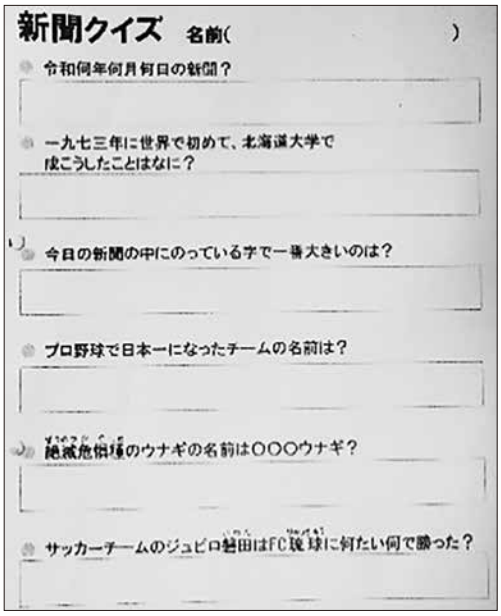
事例②「新聞クイズ」（中学年）

ねらい

クイズ形式の活動を取り入れながら記事を読むことで、最近のニュースを知ると共に、文章中の内容を正確に読み取る力をつける。

進め方

1　最近の新聞記事の１面を人数分印刷して配布する。
2　記事に載っている内容からクイズを出し、答えをワークシートに記入する。
3　答え合わせをしながら、どんな記事だったか児童が説明し、全体で記事の内容を共有する。



新聞クイズ　名前（　　）

令和何年何月何日の新聞？

一九七三年に世界で初めて、北海道大学で成こうしたことはなに？

今日の新聞の中にのっている字で一番大きいのは？

プロ野球で日本一になったチームの名前は？

絶滅危惧種のウナギの名前は〇〇〇ウナギ？

サッカーチームのジュビロ磐田はFC琉球に何たい何で勝った？

「早く正解を見つけたい」とすぐにでも新聞の記事を読みたいという姿が多く見られた。また、クイズ形式のため楽しみながら活動しており、「次もやりたい」という子も多くいた。このように、教科書等の文章からの読み取りを苦手としている児童でも、クイズ形式にしたことで時事に関する記事にも関心をもち、文字数が多くても、正確に情報を読み取ろうとする姿が多く見られた。読解力を高めるためには非常に効果的であった。

事例③「見出しを付けよう」（高学年）

ねらい

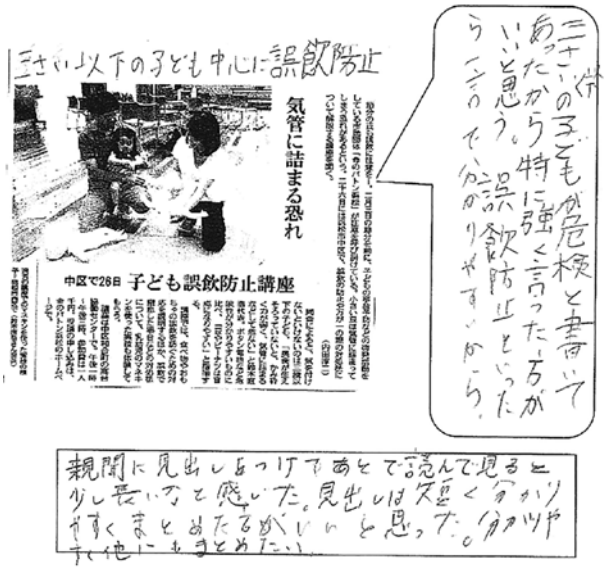
・色々な見出しの表現に触れることで、表現力を高める。
・新聞記事の内容を表す見出しを考えることで、文章を要約する力をつける。

進め方

1　見出しを隠した新聞記事を提示し、自分なりの見出しをつける。

２　実際の見出しと比較し、思ったことや考えたことを振り返る。

ワークシートには、吹き出しをつけておき、その見出しにした理由を記入させる。これにより、記事の中で特に重要だと思われる内容を自分で考えることができた。また、重要な情報をどう簡潔にまとめるか、取捨選択したり、適当な言葉を探したりと、表現を工夫しようとする姿も多く見られた。最後に、実際の見出しと自分の付けた見出しとを比較することで、より素晴らしい表現にしていきたいという思いを高めていた。



（３）成果と課題

成果

実践を通して、新聞に目を通し親しむ児童が増加した。学校で意図的に新聞と関わる機会を設けたことで、大人が読む難しいものという概念から、自分たちでも読めるものという捉えに変化してきた。また、説明文などへの抵抗感の減少もみられた。今まで学校で子どもたちが授業以外で活字に触れるものは、物語の本が大半であり、授業などで扱う説明文などに抵抗感をもつ児童が多かった。しかし、新聞記事を通して物語以外の活字を読む経験が増加したことで、説明文やコラムなどの文章に対しても抵抗なく読もうとする姿が多くなった。それによって、自分の考えを伝えたいという意欲も向上した。教科授業では、教師の求めている回答をしようと、意識してしまう傾向が少なからずあるが、時事問題を扱うことで、純粋に自分が思ったことを話しやすくなり、意欲的に発言する児童も増加傾向にあった。

課題

一般の新聞を活用しようとすると、読めない漢字も多く、意味が分からない言葉もたくさん出てくる。語彙を増やすという点では、有効ではあったが、新聞記事の内容を正確に理解するための支援はかなりの時間を要することも多く、今後の課題となった。また、児童に提示をする記事を選択し、教材化することの難しさもあった。リアルタイムを意識したうえで、各学年の発達段階に適したもの、目的に応じたものを教員自身が適切に選択し、教材化することは簡単ではなかったように感じた。

（４）まとめ

２年間の実践を通し新聞を活用したことで、少しずつではあるが、着実に言語能力がついてきている。一方、この２年間は、朝活動である「言葉の時間」を中心に取り組みを行ってきた。今後は、普段の教科指導の中でも積極的に新聞を活用していくことで、子どもたちの言語能力をより一層高めていきたい。そのためにも、教師自身が、教材として活用できそうな記事という視点から、普段から新聞に目を通していく努力をしていければならないと思う。

NIEを通して「社会」と「自分」をつなぐ

常葉大学附属橘中学校・高等学校　杉山　光輝
塚本　　学
（現 常葉高校）

1　はじめに（学校紹介）

本校は、2017年より常葉大学附属橘中学校・高等学校に校名を変更し、常葉大学との連携をより一層深めている。2017年度に新校舎が完成し、翌年度に人工芝グラウンドや Wi-Fi 環境も整備され、快適な環境の中で勉強や部活動などに取り組んでいる。

本校では、科・コース制を採用している。英数科と普通科の２つの科があり、普通科は総合進学コース、総合芸術コース（吹奏楽専攻･美術専攻）に分かれている。令和３年度の新入生から一人１台 iPad を購入し、授業や面談、ポートフォリオ、説明会など幅広く活用していこうと ICT 教育に力を入れている。

また、部活動も盛んで、野球・男女サッカーなどの運動部をはじめ、吹奏楽などの文化部も活発に活動を行っている。

2　実践内容

（1）導入理由

本校でＮＩＥを導入したねらいは、新しい学力観（「主体的・対話的で深い学び」）に対応するためにＮＩＥは有効であり、新聞を使って、調べ、考え、発表し、討論することを通して、深く学ぶ姿勢、自分の意見をまとめて表現できる力が養成できると考えたからである。

（2）組織

ＮＩＥ活動を計画的・組織的に取り組み、校内に広げるために、本校の教育開発委員会の中にＮＩＥ部会を立ち上げた。ＮＩＥ部会のメンバーとして、国語科、地歴公民科、英語科、総合学習、学年から選出された７名で構成された。

（3）全体での取り組み

①新聞コーナーの設置

昨年度は、校舎２階と４階図書室横の廊下に新聞閲覧台を設置してそれぞれ４社の新聞を置いた。生徒がいつでも自由に新聞を読むことができるような表示を工夫した。

今年度は、７社の新聞（静岡・中日、朝日・毎日・読売・産経・日経）をいつでも比べられるように、校舎３階に閲覧できる新聞閲覧棚を設置した。校舎の構造上、新聞閲覧棚を置ける場所が限られており、ややわかりづらくなったことは課題である。

②新聞読み方講座（NIE出前講座）

昨年度、高校１年生と２年生を対象に「新聞について知り、社会や、世の中に関心を持たせ、生徒の視野を広げる」ことを目的に、「新聞読み方講座」を行った。講師として静岡新聞社の吉本様をお招きし、新聞の全体構成の意味や「見出し」を例に読む方法などの説明を受けた。生徒の手元に新聞がわたると、すぐに新聞を開いて各々が関心のある記事を読んだり、ペラペラをめくったり、隣の生徒と記事について話をしている様子が見られた。自分から新聞を手に取る生徒は多くはないが、いざ手元に新聞があればページをめくり、気になる記事を見つければ読んでいる姿が見られた。新聞に触れる機会をつくることが大切であることを再確認できた。

今年度は、新型コロナウイルス感染状況を踏まえて、やむを得ず中止することにした。

（３）新聞を活用した授業等の実践

＜2019年度＞　塚本が中心に実践。

①NIE朝プリント

高校１年生（普通科）を対象に、朝８時15分～30分の朝自習の時間、NIEワークシートに取り組んだ。

担当教員が新聞記事からワークシートを作成し、内容に関する問いに対して意見を記入させた。それを各クラス担任が簡単なコメントを書いて、とりまとめて、帰りのSHRで生徒にフィードバックした。

2020年2月14日

【NIE】朝プリント⑧

1年（　）組（　）番　名前（　　）

静岡新聞で学ぼう

2020.1.12より

午前５時間制

給食前に集中、下校前倒し

県内小学校で広がり

授業時間確保、教職員多忙解消も

細かな課題 各校で工夫

Q1 「午前５時間制」について、自分の身のまわりに置き換えてみて教育効果の意味を考えよ。

Q2 「放課後子ども教室」における学校と地域社会への関わりについて、考察せよ。

（本校でも地域との連携を進めています。知っていましたか？）

次回NIEは、2月21日（金）です。

2/14　NE朝プリント　～小学校午前5時間制～

【自分の身に置き換えてみて・・・】

- 給食や昼休みが長くなるので集中力が続かない
- お腹がすいて集中が切れるんじゃないか
- ３時間目の後におにぎりなどを食べたい
- 疲れてしまう
- 5時間はさすがに長い
- 午前に5時間もつめこむと、覚えられない。
- 午前5時間に置き換えたとしても学力はこれして変わらないと思う。
- 下校時刻は特に問題がないような気がする。
- 朝の時間を有効活用できる
- 授業時間にもゆとりができる
- 午後は集中力が切れてしまうので効果的
- 小学生のとき、5、6時間目に長くなることが多くなり、あまり集中できなかったので午前に5時間やるのはとても良い。
- 帰りが早くなればうれしい
- 午後は体を動かしたり、勉強ができる。
- そこまで時間に変わりないので特に変わりなく過ごせてよい。

【「放課後子ども教室」における学校と地域社会への関わり】

- 地域住民と協力や助け合いしょしょにやることでコミュニケーションの輪を広げるのでとても良い
- 人と関わることが多くなるのでいい
- お年寄りと話ものは、本当に良いことだ。
- 知らない年齢の人と関わることではかゆしい事件があるかもしれない。
- たくさんの人と触れ合える機会ってあんまりないと思う。
- 地域の活性化にもつながる
- 地域での行事に参加できる。
- 地域との交流を深めると地域のことについて知れるのでいい
- 今まで知らなかった地域の伝承や歴史なども知ることができ地域での絆つきが強くなる
- 保護者の人も安心
- 午前5時間制で集中して勉強できることと例せて一石二鳥。

◆TPR プロジェクト参加者◆

- 私自身も放課後子ども教室のボランティアとして子どもたちと関わっているのでとても良いと思う。いろんな地域の子とかかわりが持てて楽しいので、ぜひ多くの人たちにやってほしい。

＊TPR プロジェクトなど、地域への取り組みで区域は様さんの時代です。多くのことにチャレンジ!!

☆どれが正解、というのはありません。でも、考えることが大切。
そして、自分と違う意見を知ること、それを踏まえてさらに考えることが大切です。

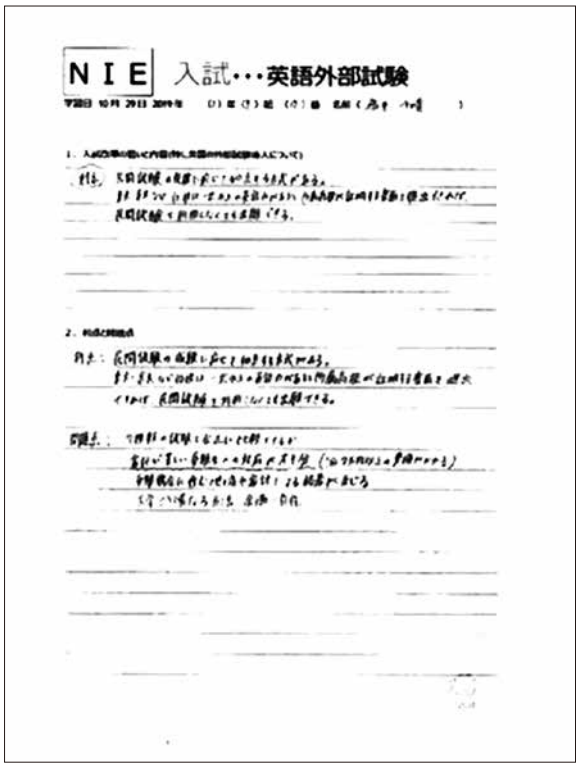
②NIEノート作りなど

授業中に行ったスクラップノート作りのこと。生徒に新聞を配布し、興味を持った記事を選ばせ、その記事についての感想を書かせた。また、教員が記事を選び、生徒に感想を書かせた後、意

見交換をさせた。アナログ的作業ではあるが紙媒体としての新聞の良さを実感できる。また記事をスクラップすると、「他人事から自分事」に代わる効果があると感じた。

③タチバナクエスト（課題探究授業）

毎週火曜日の放課後、希望者を募って行った。教科の補習ではなく、自分の興味・関心に沿って自由に深く学ぶのが探究学習である。記事から「途上国の現状」、「映画評から見た差別」など様々テーマを取り上げた。中でも生徒の興味を持ったのが、「英語民間試験導入延期」であった。ジグソー法を用い、グループで話し合いながら記事を読み取り、意見交換をして各自の考えを深めていった。図らずも「身の丈発言」で、世間の耳目を引いたテーマだけに意見発表は盛り上がった。授業の様子は静岡新聞の取材を受けることになった。



NIE 入試・・・英語外部試験

読解、発信力 新聞で育成

常葉大橋高「タチバナクエスト」

社会に目を向ける契機に

④その他

ア．県議会訪問

タチバナクエスト受講生徒が参加した。事前に新聞から予備知識を仕入れた。

イ．静岡新聞 ひろば10代 投稿

よく書けた意見・感想を投稿した。中には卒業してからも投稿する者がいて、望外の喜びである。

＜2020年度＞　杉山が実践。

【実践のねらい】

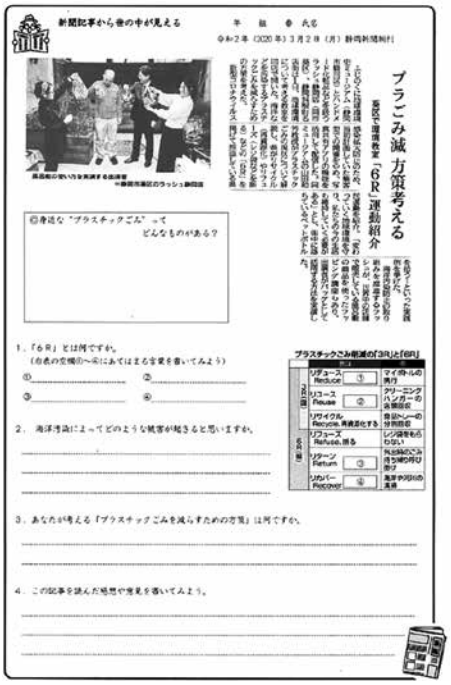
今回、ＮＩＥを実践するときに３つの段階（「新聞記事を通して社会の動きを知る」→「社会の動きと自分との接点を見つける」→「できることを見つけ、取り組んでいく」）を設定した。

①新聞スクラップノート作り

１週間の中で特に関心を持った新聞記事をノートに貼り、それを選んだ理由、記事の概要、感想・意見などを書いて、毎週月曜日に回収した。それにコメントを書いて水曜日までには返却した。１学期は、新型コロナウイルス関連の記事が目立ったが、２学期になるとコロナ関連以外の記事が貼られるようになった。

②ワークシート

週３時間の「現代社会」では、毎週１時間をNIE の時間とし、関心を持った新聞記事をワークシートに添付して、内容の要約や意見・感想を書いた。最初は新聞を読むのに時間がかかったり、内容をどのように要約したらよいか苦戦したりしていたが、次第に要領をつかんで枠内いっぱいに記入した。自分の考えや感想も単に「～と思う」だけから、その理由や根拠などを明確にしてまとめられるようになった。



③タチバナクエスト（課題探究授業）

今年度は、「今を考える（ワークシート活用）」・「SDGs を考える」の２部構成で展開した。

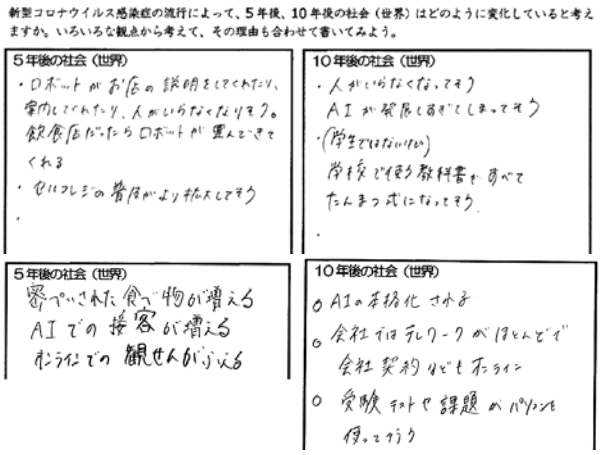
ア.「今を考える（ワークシート活用）」

新型コロナウイルス感染拡大により、私たちの生活だけでなく、世界全体に様々な影響を与えている今だからこそ、このような体験を生かしたいと考え、コロナ関連のワークシートを作成した。新聞記事を選択する基準として、コロナ禍が終息したあとでも日常生活に影響を与えるものとした。

〔テーマ〕
① オンラインによるコミュニケーション
② コンビニおでん ― 感染防止策
③ 新型コロナウイルス感染による 今後の社会

左側に新聞記事、右側にその記事に関する設問を載せたワークシートを配布し、まず新聞記事をじっくりと読み、その後で各問いに取り組んだ。問いは、新聞記事の内容を理解するものと、それに関連して答え（正解）のないものを用意した。特に後者については、グループをつくり、お互いの意見や考えを発表し合った。初めは感覚的に「～と思う」というように発表していたが、「なぜそう考えるのか」を促すことで、自分なりの理由や根拠を示すようになっていった。

生徒のワークシートより



イ.「SDGs を考える」

今年度より本校では部活動で SDGs を取り入れた活動を行っている。新聞にも SDGs 関連の記事を目にすることが多くなっている。そこで以下のような手順で実施した。

〔進め方〕

① 関心のある「17の目標」を選択する。
② 選択した「目標」に関連する新聞記事を収集する。
③ 収集した新聞記事の中から１つ選択する。
　・何が課題か、その要因、影響を考える。
　・その課題を身近なことに置き換えてみる。
④ 選択した「目標」を実現するために、“できること”“できそうなこと”を考える。
⑤ ③④をレポートとしてまとめる。
⑥ 発表する。意見交換をする。
⑦ 評価・感想

進めていく中で生徒が苦戦した点があった。

ａ．新聞のどの記事が、選択した「目標」に関連しているのか判断しにくい。
　→そこで再度「目標」の内容を確認させ、キーワードとなることばを手掛かりに選ぶように助言した。

ｂ．記事の内容によって、選択した「目標」を実現するために“できること”が限定される。
　→身近なもの（こと）に置き換えて考えてみることを助言した。

この実践を通して、生徒は新聞の面白さに気づいたり、自分の意見を持つことの楽しさを知ったりすることができた。

生徒のワークシートより

5．最後に、感想を教えてください。

今までは、ニュースを知ったところで…。という思いだったけど、これを期に ひとつのニュースに対して自分なりに意見を持つことの楽しさを知ったので、日常的にニュースに目を向けていこうと思いました。

新聞というものはただニュースが書いてあるというものではなく、人々の思いや筆者の考えというものがとても細く書かれていて、とてもおもしろいものということを知った今は、あまり読むことができないので読むようにしていきたいです。

３　実践の成果と課題

ＮＩＥを始める前と後でアンケートをとった。生徒が新聞を読まない理由として挙げている主なものは「テレビやネットニュースから情報を得ている」というものである。時間をかけて読むという習慣がない、新聞に時間をかけないという実情が見られた。

（アンケート）新聞を読まない理由
（タチバナクエストに取り組む前）
・興味があり、より深く知りたいと思う記事は見るが、それ以外は短くまとまったネットニュースで済ませてしまうから。
・テレビで見た方が読むより早く内容を理解できるから。
・読む時間、興味のある記事がないから。

今回の実践から得られた成果として、１つは「社会（世の中）のことに関心を持つようになった」ことである。初めは漠然と新聞を見ていた生徒も、次第に気になる見出しや写真にひかれて読むようになった。

新聞で知ったことが授業で話題になると意欲的に話をしたり、テレビでニュースを聞いてより関心を持ったことが感想からわかった。

２つめは「自分の言葉で意見を持つようになった」ことである。新聞スクラップやワークシートに取り組む中で、関心を持ち始め、自分ならこう考えるということを少しずつ書けるようになってきた。小論文にも意欲的に取り組むようになった。

課題としては、１つは「新聞を読む機会（習慣）をどう確保するか」である。何もしなければ、残念ながら生徒自ら新聞を読むことは少ない。ある程度読む習慣、身近なものになるにはどのような方策が有効かを検討していきたい。

（アンケート）
普段、何でニュースを知りますか。
テレビ　86%　　インターネット　43%
（アンケート）
新聞を読む機会があれば読みますか。
はい　86%　　いいえ　14%
（対象：タチバナクエスト受講者）

２つめは「Newspaper in Education か、それとも News in Education か」である。コロナ禍で休校期間中に新聞スクラップノート作りを行ったが、新聞のない家庭も少なからずあることがわかった。社会（世の中）の動きを知ることに焦点を当てるならば、新聞以外の媒体からも学べる。新聞だからこその良さや、“学校”が新聞を準備して“学校”で新聞を使った授業（取り組み）を行うことの良さを探究しつつ実践していく必要があると感じた。

学びが深まり広がるＮＩＥ

静岡県立清水西高等学校　　吉川　契子

１　はじめに

（１）学校概要

静岡県立清水西高等学校　（静岡市清水区青葉町）は、全日制普通科の高等学校である。全校生徒数は655名（2021. ２.16現在、１年193名・２年222名　３年240名）であり、四年制大学･短大･専門学校・就職等多様な進路に対応する必要がある。また、地元志向が強く、多くの生徒が卒業後静岡県内に進学就職する。

（２）生徒の実態

運動部に所属している生徒の割合は半数以上であり、スポーツに関心を示す。所謂「推薦入試」を利用する生徒が多く、小論文入試への対応も必要であるが、読解力に課題がある生徒も少なくない。地元志向が強い特徴から将来地域の担い手になることが期待されている。市民としての教養、生活のための知恵を身につける姿勢を授業で養う必要があり、そのためにＮＩＥは極めて有効であると予想した。

本校では図書室入口の新聞掲示や授業やクラス経営での新聞活用等ＮＩＥ活動に取り組んでいる職員は多い。

２　ＮＩＥ実践指定

ＮＩＥ実践指定は2018～2020年度の３年間であった。

理科・地学基礎授業では１年生６クラス全員に実践指定で提供された新聞によるＮＩＥを実施した。学年部やクラス単位でも利用の要望に応じて提供していただいた新聞を活用した学習活動を展開した。

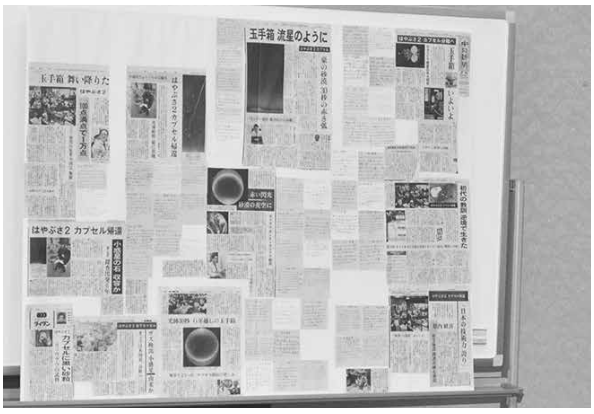
３　実践方法

（１）校内掲示
（２）授業での活用　　（理科・地学）
（３）部活動･進路指導での活用　（自然科学部）
（４）学年「朝の時間」ＮＩＥワークシート
（５）医療看護コース
　　（教室に配置し切り抜き紹介）
（６）学校行事
　　（図書課主催　朝の読書啓発行事「耳すま」）

４　理科学習での活用例

（１）年間の活用

①授業の単元に応じて、過去のスクラップ記事の提示
　教材提示装置と読み聞かせ・印刷配布・回覧
②授業学習順序に関わらず「地学ニュース」の紹介
　台風等気象災害　地震災害　火山災害　はやぶさ２の帰還等天文現象
　地質（恐竜発見・チバニアンなど）
　柔軟な話題で⇒「令和」も話題に（日本の四季が文化を育んだ。地球温暖化で気象が変化することは避けたい、など）
　教材提示装置と読み聞かせ・印刷配布・回覧
　予習復習になると強調し教科書を参照させる
③新聞記事を活用した学習の展開
　スクラップ・ピックアップ⇒感想記入・災害の場合対策考察⇒グループ発表⇒災害対策話合（他クラスと感想リレー）⇒新聞切り抜き掲示作品作成・掲示・投書



④新聞スクラップの課題
ゴールデンウィーク・休校期間・夏休み・冬休み
⑤自然科学系部活動
上記①～⑤に加え外部に取材し、その結果を新聞にまとめる、経験を入試面接に生かす指導
温暖化に伴う熱中症増を新聞で調べ発展させて研究　など

（2）多様な方法と組み合わせる

①メディアミックス
インターネット情報・テレビニュース録画・ドキュメンタリーテレビ番組視聴
②関連書籍の紹介
③実体験（見学・現地取材・実験実習・話し合い・発表）などとの組み合わせ

（3）NIEを補助するツール

①理想教育財団のはがき新聞用紙などの利用
②各新聞社のＮＩＥワークシート

（4）その他の外部機関との協力

①河川環境管理財団（「水害からわが町を守る学習」過去の水害七夕豪雨に関する聞き取り調査）⇔台風など水害の新聞記事学習
②海洋教育プログラム（外部講師授業…海洋プラスチックごみ）⇔海洋プラスチックごみ記事
③東京エレクトロン（新聞広告　メンデレーエフ周期律発見 150 周年の記念の周期律表取り寄せ）
④出張講義（新聞に掲載された清水港 120 周年の行事における海上保安庁の講演内容を１年生全 HR で出張講義依頼）を実施し、取材を受け、新聞に掲載していただく。
⑤新聞に掲載された方に取材（静岡市清水区草薙でナウマンゾウの牙発見…発見者に取材）

（5）コンクール等への応募

①新聞切り抜き作品コンクール
②新聞投書
③新聞コンクール（ジュニアシッピングジャーナリスト）

5　成　果

新聞を活用して多様な学習活動を展開した結果、まず、ニュースを学習に生かす習慣を形成することができた。最初はニュースに関心を示さず、新聞から指示された情報を探すのに時間がかかり苦労している生徒も少なくなかったが、次第に、教室に入ると自然とニュースを話題にし、新聞から素早く適切な記事をピックアップすることができるようになっていった。そして、ニュースと学習との関連を認識するようになった。学問と日常生活の関連が理解できるようになると、学習意欲が向上した。学習内容がニュースに出ていることを発見して学習の意義を悟り、ニュースをヒントに未来の生活の変化を予想することができるようにもなった。

また、教師が予想しないような、多くの分野に関心を向けたり、難易度の高い内容にも意欲を示す生徒も増えていった。「ブラックホールの撮影成功」、「はやぶさ２」や「チバニアン」のニュースを通じて、学問が生きている、という実感も得られたようだ。

読解力も向上した。速読してなおかつ文意を把握し理解する力、文章を書く力が身についた。多くの活字に触れることで、誤字も減少した。

生徒によっては、大学入試面接に学習成果を生かすことができた生徒もある。ある生徒は、国公立大学の看護学部に進学を希望していた。「熱中症」や「新型ウイルス」の新聞スクラップを継続して行い、地域の医療の課題に気が付いた。そして、温暖化と健康についての研究を行うなどの学習活動も並行して行い、進路意識を向上させ、大学合格を果たすことができた。新聞を活用した「考える習慣」の形成は大学進学にも役立つのである。年度末になると、年間を通じた新聞を活用した学習を通じて、生徒たちが、年度当初に比べて、社会に関心を持ち、考える力を身につけたことを実感できるようになった。

本校の生徒は特に、「自然と人間」への関心が高い。自由スクラップで、生徒たちは自ら、「サクラエビ異変」「リニア新幹線」「燃料電池車」などの記事に、関心を持った。記事に関する感想を添えてグループで紹介させ、意見を書かせると、科学的な知識に基づき、自然保護の意識を鮮明にした意見が寄せられた。また、「はやぶさ２」に関する新聞スクラップでは、日本の科学技術への尊敬と信頼と誇り・人としての生き方への共感・宇宙開発の未来への希望などを述べる多様な意見が見られた。

新聞記事を活用した授業では、時に、教師の側で、暗記した知識に基づく単一の答えを要求するのではなく、生徒が自ら考え発見することを重視しているが､それを継続することで､生徒たちが、彼らの若い感性で、柔軟で自由な発想、新しい情報をもとに自分の意見を述べる姿勢が育っていることを確信した。生徒の着想の多様性は、教師の予想を超えることもあり､「新聞を読んだから理解できた」といった感想も寄せられた。最後に、「はやぶさ２」の新聞記事を、グループ学習させた最後に書かせた感想を紹介したい。

【生徒感想】

○小惑星には自分達のまだ知らない様々な物質があるのではないかと思います。

○「もう映画は作らせない」という言葉には色々な思いが込められているんだなと思った。初代はやぶさは色々なトラブルがあり、映画も作られてしまった。しかし今回のはやぶさ２では、何十回と、運用訓練を繰り返して無傷で帰って来ることができた。…「100点満点で一万点」…チームのメンバーと協力し諦めずにやった成果だと思う。

○探査ロボット「ミネルバ２」…の成功は一発で成功したわけではなく…なぜ失敗したかを考えて成功したからすごいと思う。自分も一回失敗したから折れるのではなく、なぜ失敗したかを考えて努力していきたいと思った。

○2014年に地球を出発。2019年に小惑星リュウグウに着陸し、６年経った2020年、採取した砂を持って地球に戻った。彼らにとって「やったこと」でもあるが「やりたかったこと」でもある。私は、彼らの「やりたかったこと」だけを知って…十分にJAXAの活動を理解している気でいた。地学の授業でははやぶさ２についてテレビ番組を見たり、新聞を読んだりし…彼らは「やりたかったこと」をするために「やらなければならないこと」に力を入れていた…多くの人が集まって「協力する」ということ…改めて考えることができました。…学校生活で求められることの多い「協力」…大きな力になるとわかった…

○はやぶさ２が過去の探査でできなかったこと、世界初のことを成し遂げたことを新聞で知った。過去の探査は失敗続きで大丈夫かと思ったが、今回は過去に失敗したこと経験として見事、成功して見せた…津田さん達がプロジェクト成功のため動いているのを全く知らなかった…今回のことから、何かを成し遂げるには、誰かがたえまない努力をしていること、苦労していることを改めて知った。…人への感謝と敬意、…が大切なんだと確信した。普段、先生方や親が口うるさく言っていたことは、社会に生きるためには、必要不可欠なものだったんだと知った。

○カプセルが地球に落下するまでの状況を知った。…実際に見てみたかったし、自分の職業に誇りを持てるような人になりたいと思った。

○目標の地点にぴったりと弾丸を撃ち込めたことも本当に素晴らしいことで様々な人たちの努力によってできたことだと知った。…はやぶさ２にとても興味が沸いた。岩石採取に成功するまでにどのような試練を乗り越えてきたのか、採取した岩石によってどのようなことがわかるのかなど様々な知りたい事調べたい事ができた。…今回…知ることができた機会を無駄にしないようにしたい。…今後の宇宙研究に大いに役立ち生命の起源に迫れる素晴らしいことだと改めて感じた。

○…宇宙にはまだわからない事が存在していると思うのでこの新聞からとても興味がわきました。…チームの方々のおかげで勇気と感動…このようなニュースは自分はあんまり考えたりしなかったが、日本の技術は日々進歩しているのでこれからも期待していきたいと思いました。このように人々に感動を与えられることはとてもよいことだなと感じました。はやぶさ２をこれからも応援していきたいなと思いました。

○私は、はやぶさ２の新聞記事やテレビのニュースを見て…JAXAの方々は、たくさんの研究を繰り返し、リュウグウからの帰還を成し遂げました。…その構造を深く知りたいと思いました。しかしそれ以上に…JAXAの方々のはやぶさ２にかける思いや情熱が伝わり深く感心しました。困難な問題に対してチームで乗り越える姿勢、１つのことに懸命になる姿勢は、私たち若者が機械に頼りすぎることのない一人の人間として、…その姿勢を私たちも持つべきものだと感じました。

○私は、はやぶさ２について興味も関心もありま

せんでした、しかし、新聞記事やテレビニュースではやぶさ２について知ったときは、ものすごく感心しました。…どのように宇宙にたどりつくか…疑問がたくさん浮かんできたのです。疑問の答えがわかった瞬間目が飛び出るほど驚きました。多くの…高精度なものばかりが仕組まれている…やはり、宇宙までたどり着き試料を得て地球に戻ることができるのは、小さな積み重ねだと思いました。…日本の技術力の高さを誇りに思います。

○僕は、このはやぶさ２のたくさんの記事を見て自分も頑張ろうと思いました。このはやぶさ２が成功できたのは「努力」…だから僕も、将来に向けてたくさんの努力をしていきたいと思います。

○重さ16キログラムの中に、日本の街町工場の技術がたくさん入って工夫されていることにとても感動しました。新たなプロジェクトも成功させて今後につなげていってほしいです。

○パーツ１つ１つに職人たちの技がつまっており、その努力が着陸、及びカプセルの切り離し成功の裏側にあると新聞を読んで感心しました。…次の活躍を期待したい。

○…このような研究は自分に関係ないと思っていました。しかし、よく考えてみるとこのように宇宙の研究を深めていけば、地球以外の惑星に住めるようになるかもしれないとワクワクしました。…帰ってきた「玉手箱」の研究結果の報告が楽しみだなと思いました。

○…日本は世界から見ても高い技術を持っていることはすごいと思いました。

○…太陽系が誕生したころの砂の採取に成功したことで、生命の起源に迫れるということなので、この先の研究結果がとても楽しみだと思いました。

○…リュウグウのことについて知識も少ないので、どれほどすごいことなのかあまりわかっていませんでした。ですが、ある新聞記事に「１キロメートル先にいるテントウムシの斑点を狙うほど高い精度だった」と記載されており、どれほど難しくすごいことだったのかが改めてわかりました。…とてつもない努力から生まれた結果だと思います。日本中、世界中の方がこのすばらしい努力に心を打たれたのではないかと思います。「努力は必ず報われる」この言葉を証明してくれた。そんな気がします。これから長い人生を送る中で、大きな壁にぶつかることが何度かあると思いますが、努力し…目標を達成したいです。

○私は、宇宙のことやそれに関することなどを全く知らなくて、それでもこれがすごいということは分かりました。わずか0.1グラムから１グラム程度の試料から太陽系の起源、命の材料が解明できるなんてすごいと思いました。これからの新しい発見がとても楽しみです。

○いろいろな新聞記事を読んだり、テレビの特集を見たりして、はやぶさ２が何をしているのかがわかりました。…簡単にできているようだけど本当は数えきれないほどの苦労があってここまで来れたんだと知ることができました。これからの「はやぶさ２」の活動が楽しみです。

○…とても驚きすごさを感じました。…長い道のりと苦労がたくさんあったと思います。……この成功は誰か一人だけではなく一人一人の力が集まったことによってつながったと感心しました。…どんなことでも地道な積み重ねをし、自分の目標達成の一歩につながるようにがんばりたいと思います。

○…様々な人たちと協力し合い成功するまで努力し続けたのはものすごい事だと思います。その努力が人々に勇気と感動を与えると分かったので、今後の生活に生かしていきたいです。

○…あきらめずに努力し続ければ必ず結果は返って来る、…「努力は必ず報われる」この言葉を胸に悔いの残らない人生を送りたい。

○私はニュースなどを見る機会が少なく世の中の出来事や宇宙に関することをあまり知りませんでした。今回新聞記事ではやぶさ２について初めて知りました。…素晴らしい成果だと思います。宇宙は知らない事ばかりで興味を持ちました。

○私は新聞やテレビ番組などで見るまで、はやぶさ２という物が一体何のために宇宙へ行き何をしているのかということを全く理解していなかった。だが、新聞ではやぶさ２を知ったとき私は感動したのだ。…人類の努力と知恵の結晶であるはやぶさ２という存在に心を奪われたのだ。…

○最初ははやぶさ２について全然知りませんでしたが、新聞やテレビニュースを見て偉大なこと

を成し遂げたのだと知りました。

○私はあまり宇宙に興味がない。しかし、今回はやぶさ２の快挙をテレビや授業で何回も聞いてすごいことをしたんだなと思った。

○私は、宇宙に対して最初は興味がなかったが、はやぶさ２を通して宇宙は多くのなぞがあり、もっと宇宙のことを知りたいと思った。…

○…私は、はやぶさ２が私たちに対して影響のある計画に成功したと言われても何ひとつ実感がわかなかった。…なぜはやぶさ２がこれほどまでに褒められるのか疑問を抱いた。…大変なことだと思った。…驚きと興奮が込み上げてきた。…

○私は探査機が…難しいことだとは思っていなかった。…だが授業で勉強してわかった…はやぶさ２を学習して学校生活がより充実するものになった。

情報リテラシーの向上を目指して

～NIE 実践を通じて～

静岡県立浜松西高等学校　　吉田　忠弘

【実践報告書概要】

(1) 浜松西高校について（概要）

(2) ＮＩＥ実践と運営

①ＮＩＥ実践の目標と期待される効果について

②実践事例

a、「現代社会」で行った新聞タイムについて

b、校内の新聞の利用について

c、「しずおか新聞感想文コンクール」への応募について

(3) 実践の成果と課題

①新聞タイムの実施状況について

②しずおか新聞感想文コンクール結果について

③生徒へのアンケート結果分析

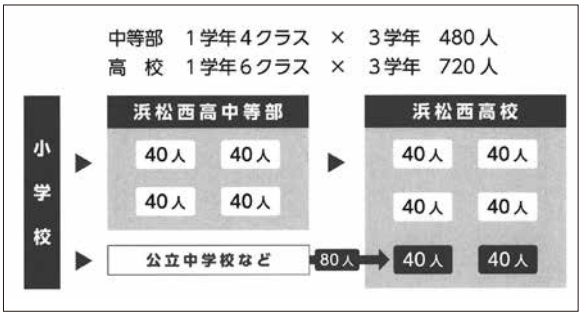
④教員からの評価と反省、NIE 活動の広がり

⑤今後の課題

1、浜松西高校について

・創立97年目、ほとんどの生徒が上級学校へ進学するいわゆる「進学校」

・県立の中高一貫校（今年で19年目）



●令和２年３月　合格状況（現役）

■国公立大学

北海道大学	3	一橋大学	2	静岡大学	13	名古屋大学	8	京都大学	1
大阪大学	1	静岡県立大学	10	北見工業大学	1	東京海洋大学	1	浜松医科大学	3
三重大学	1	滋賀大学	1	京都大学	3	滋賀県立大学	1	福井大学	1
金沢大学	1	信州大学	3	大阪大学	3	高崎経済大学	1	名古屋市立大学	3
愛知県立大学	1	愛知県立芸術大学	1	岡山大学	1	埼玉大学	1	埼玉県立大学	1
千葉大学	1	山梨大学	1	神戸大学	2	奈良教育大学	1	奈良女子大学	1
奈良県立大学	1	和歌山大学	1	鳥取大学	1	横浜市立大学	2	大阪市立大学	1
大阪府立大学	3	宇都宮大学	1	群馬大学	1	茨城大学	5	筑波大学	5
新潟大学	1	富山大学	1	名古屋工業大学	1	豊橋技術科学大学	1	福井大学	1
滋賀医科大学	1	鳥取大学	1	島根大学	1	岡山大学	1	山口県立大学	1

■私立大学（抜粋）

青山学院大学	3	立教大学	4
学習院大学	4	早稲田大学	8
慶応義塾大学	7	同志社大学	14
上智大学	1	関西学院大学	22
中央大学	26	立命館大学	43
東京理科大学	13	関西大学	13
法政大学	9	関西学院大学	7
明治大学	13	摂南大学	1

【令和２年度「学校案内」より】

《世界的な活躍をされた／されている著名なOB・OG》

・古橋廣之進 氏（フジヤマのトビウオ、戦後の水泳界で次々と世界記録を樹立）

・溝口紀子 氏（柔道家、アトランタ、バルセロナでの五輪代表選手）

・天野浩 氏(2014年ノーベル物理学賞受賞者、世界初の青色 LED に必要な高品質結晶創製技術の発明に成功)

2、ＮＩＥ実践と運営

（1）本校での NIE 活動の目的

【実践校の抱負】情報リテラシーを育む一助に

「公立小中高校の学校図書館への新聞配備に財政措置が採られる等、教育現場における新聞の重要性が益々高まってきております。本校でも、新聞閲覧台に６紙を用意し、生徒・教職員に提供されています。現在では、様々なメディアが普及しており、それらが提供する情報に対して、その信憑性や有益性などを判断し活用する力、いわゆる情報リテラシーを身に着けていくことが益々強く求められています。

『ネットのニュースだけで十分』といった意見も聞かれますが、新聞を使って、『記事を正確に読み取り、その内容を要約し、それに対する自分の意見を持ち、他者に伝えていく』を繰り返すことによって、前述の能力を育む一助となればと考えております。」（静岡新聞 2019 年７月「新規実践校が抱負」より）

⇒「生徒の情報リテラシーの向上を図ること」を最重要課題に設定

（2）NIE 実践により期待される効果

《自主的に新聞を読む習慣を身に着けることによって》

☆情報リテラシーの向上、発想力・対話力・批判力および表現力等の向上

・学習面：社会への興味や関心の高まりによる、全教科・科目における内容理解の深化
・進路関係：小論文、面接、AO 入試等に対する対策
ex.「月間 切抜き速報」の活用促進
・総学／総探：実社会への関心の高まりが自身のキャリアデザイン構築に貢献

（3）NIE実践に臨むにあたって、研究会で拝聴したことや『NIEニュース』等の報告書で語られていたことで、特に印象深かった言葉の紹介

- 持続可能なＮＩＥ活動（特定の教員の過度な努力や熟練に頼らない）
- 生徒の家庭での新聞購読状況に左右されないＮＩＥ活動。
- 教員が新聞を読んでいる姿を見て、「暇そうだね。」は禁句。「教材研究に熱心だね。」との声かけが有効。(特に管理職の心構え)
- NIE 活動の教育的効果の可視化、数値化は非常に困難。（⇔「新聞科学研究所」等の発表している各種データの存在）
- 高校現場は「個人商店」の集まりであるため、「総合商社」化は困難。
- 授業進度との兼ね合い。特に、「センター試験」に代わる「共通テスト」対策も考慮。
- 結局、「こうでなければならない」といった王道があるわけではなく、その学校ごとに合ったＮＩＥの実施方法が存在する。

（4）NIE 活動の実施内容について

①授業における「新聞タイム」を実施

各家庭から新聞を持参させるのではなく、校内に配置されている新聞を利用して、１年生の「現代社会」の授業（３人で担当）の中で以下の通りＮＩＥ活動としての「新聞タイム」を実施する。

休み時間のうちに、教科当番が社会科研究室からクラス人数分の新聞をクラスに運び、全員に配布する。その際に例えば、家庭で購読している新聞とは違うものを選ぶなど、各生徒は可能な限り多くの種類の新聞に触れるよう留意する。生徒は、配布された新聞から、最も興味や関心を持った記事を選び、その内容についての自分の意見や感想を、配布済みの記録用紙にまとめる。最後に、最後列の生徒は配布された新聞の回収を行う。これらの活動を10分間以内で実施する。

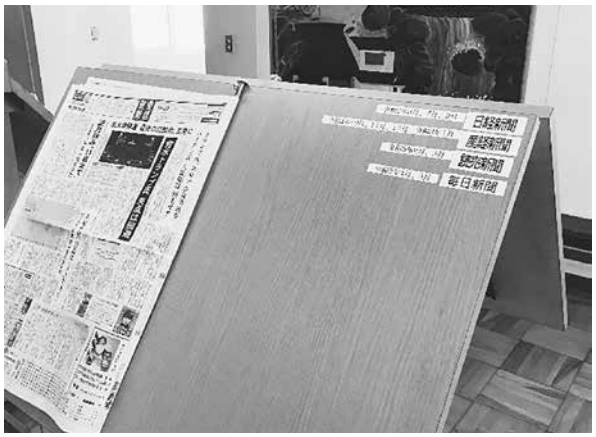
【「現代社会」の授業での「新聞タイム」の様子】

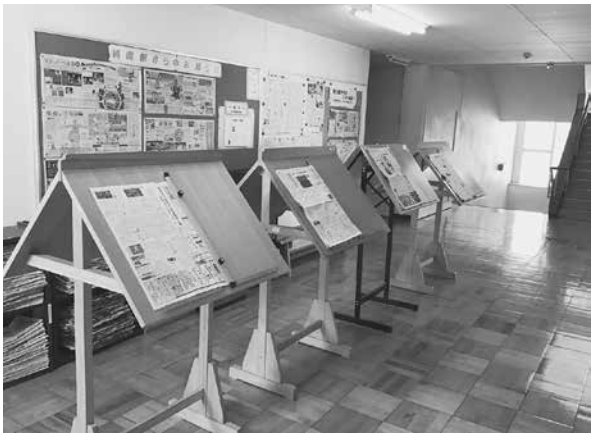
②校内の新聞の活用について

a、本校の新聞配置について

・職員室３紙（静岡新聞、読売新聞、Japan News）
・事務室２紙（静岡新聞、中日新聞）
・新聞閲覧台６紙（中日新聞、朝日新聞、日刊スポーツ、the japan times alpha 及び前日の Japan News、の従来４紙に加えて、日本新聞協会及び静岡新聞社から４か月～１年単位で寄贈される、静岡･毎日･読売･産経・日経新聞の各紙から２紙、の合計６紙）

※新聞閲覧台は、図書館の別置として存在する「新聞コーナー」のものを指す。





【新聞閲覧コーナーの様子】

【新聞のストック棚】
（過去２～４か月分を新聞別に整理）

b、校内設置の新聞の流れ（図書課で担当）

前述の「職員室・事務室・新聞閲覧台」の前日分（合計10紙程度）⇒ 社会科研究室 ⇒ 現代社会の授業 ⇒ 新聞コーナーの保存棚 ⇒ １～３か月後に適宜廃棄処分

③「現代社会」の資料集について

新聞活用について定評のある池上彰氏が監修した資料集である、『ライブ！現代社会 2021』（帝国書院）を採用した。

④「しずおか新聞感想文コンクール」への応募について

夏季休業中であっても、新聞に触れる機会を持たせるため、「現代社会」の課題として、コンクール応募感想文を仕上げ、２学期の始業時に提出するようにした。１年生全員から提出された感想文は、担当者（吉田）によってプレスタワー内の静岡新聞社に届けられた。

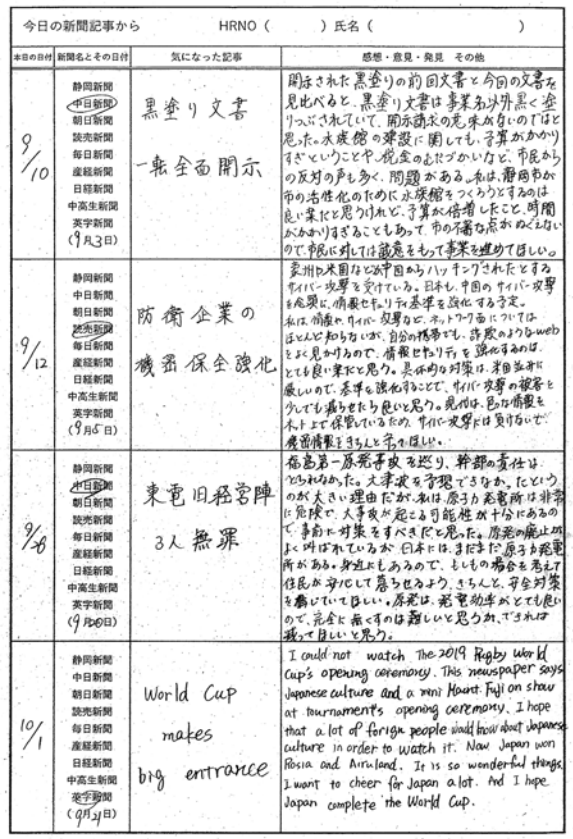
【http://www.at-s.com/blogs/nie より】

3、NIE実践の成果と課題

（1）新聞タイムの実施状況について

計４回分で１枚の記録用紙を、各生徒から年間で合計８枚提出させたので、新聞タイムに費やした時間は、10×32＝320分 となった。

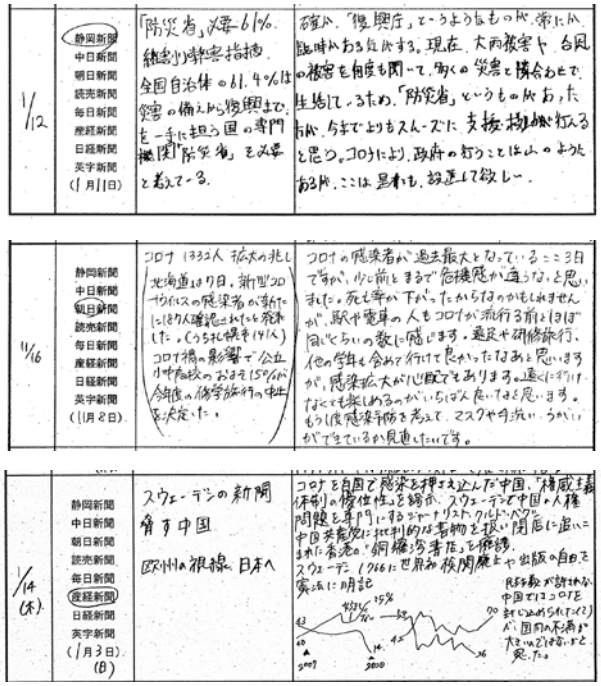
プロスポーツの勝敗や結果などの安易なものに流れずに、事例で示した通り、自らの興味のある記事を選択し、その要点をまとめ、それらに対する自分の意見や感想を、短時間内にも関わらず的確にまとめている様子が、ほとんど全ての生徒において見られた。



今日の新聞記事から　HRNO（　　）氏名（　　）

本日の日付	新聞名とその日付	気になった記事	感想・意見・発見　その他
9/10	静岡新聞 中日新聞 朝日新聞 読売新聞 毎日新聞 産経新聞 日経新聞 中高生新聞 英字新聞 （9月3日）	黒塗り文書 一転全面開示	関係された黒塗りの前回文書と今回の文書を見比べると、黒塗り文書は事業名以外黒く塗りつぶされていて、開示請求の意味がないのではと思った。水族館の建設に関しても、予算がかかりすぎということや、税金のむだづかいなど、市民からの反対の声も多く、問題がある。私は、藤岡市が市の活性化のために水族館をつくろうとするのは良い案だと思うけれど、予算が倍増したこと、時間がかかりすぎることもあって、市の不満な点がぬぐえないので、市民に対しては誠意をもって事業を進めてほしい。
9/12	静岡新聞 中日新聞 朝日新聞 読売新聞 毎日新聞 産経新聞 日経新聞 中高生新聞 英字新聞 （9月5日）	防衛企業の 機密保全強化	豪州や米国などが中国からハッキングされたとするサイバー攻撃を受けている。日本も、中国のサイバー攻撃を危惧に、情報セキュリティ基準を強化する予定。私は、情報やサイバー攻撃などネットワーク面についてはほとんど知らないが、自分の携帯でも、許可のようなwebをよく見かけるので、情報セキュリティを強化するのは、とても良い案だと思う。具体的な対策は、非常に厳しいので、基準を強化することで、サイバー攻撃の被害を少しでも減らせたらと思う。見ずに、色々な情報をネットよって保管しているため、サイバー攻撃には負けないで、機密情報をきちんと守ってほしい。
9/26	静岡新聞 中日新聞 朝日新聞 読売新聞 毎日新聞 産経新聞 日経新聞 中高生新聞 英字新聞 （9月20日）	東電旧経営陣 3人無罪	福島第一原発事故を巡り、幹部の責任は問われなかった。大津波を予想できなかったというのが大きい理由だが、私は、原子力発電所は非常に危険で、大事故が起こる可能性が十分にあるので、事前に対策をすべきだと思った。原発の廃止がよく叫ばれているが、日本には、まだまだ原子力発電所がある。身近にもあるので、もしもの場合を考えて住民が安心して暮らせるよう、きちんと、安全対策を講じていてほしい。原発は、発電効率がとても良いので、完全に無くすのは難しいと思うが、ざるべき減らしてほしいと思う。
10/1	静岡新聞 中日新聞 朝日新聞 読売新聞 毎日新聞 産経新聞 日経新聞 中高生新聞 英字新聞 （9月31日）	World Cup makes big entrance	I could not watch The 2019 Rugby world Cup's opening ceremony. This newspaper says Japanese culture and a mini Mount Fuji on show at tournament's opening ceremony. I hope that a lot of foreign people would know about Japanese culture in order to watch it. Now Japan won Russia and Ireland. It is so wonderful things. I want to cheer for Japan a lot. And I hope Japan complete the World Cup.

【提出された記録用紙の例】



1/12	静岡新聞 中日新聞 朝日新聞 読売新聞 毎日新聞 産経新聞 日経新聞 英字新聞 （1月11日）	「防災省」必要61% 組織少数意指摘 全国自治体の61.4%は 災害の備えから復興まで を一手に担う国の専門 機関「防災省」を必要 と考えている。	確かに、「復興庁」というような物が、常に忙しく臨時的な感じがする。現在、大雨被害や、台風の被害を自然も関して、多くの災害と隣合わせで生活しているため、「防災省」というものがあった方が、今までよりもスムーズに支援・復興が行えると思う。コロナにより、政府の行うことは山のようにある中、ここは是非とも、設置して欲しい。
11/16	静岡新聞 中日新聞 朝日新聞 読売新聞 毎日新聞 産経新聞 日経新聞 英字新聞 （11月8日）	コロナ 13322人 拡大の兆し 北海道は9日、新型コロナウイルスの感染者が新たに13名確認されたと発表した。（うち2人は検査を行なく） コロナ禍の影響で公立小中高校のおよそ15%が今年度の修学旅行の中止を決定した。	コロナの感染者が過去最大となっていることを聞いたが、少し前とまるで危機感が違うなと思いました。死亡率が下がったからなのかもしれませんが、駅や電車の人もコロナが流行る前とほぼ同じくらいの数に感じます。遠足や研修旅行、他の学年と合わせて行けて良かったなあと思いますが、感染拡大が心配でもあります。遠くに行けなくても楽しめるのがいちばん良いなと思います。もう後感染予防を考えて、マスクや手洗い、うがいができているか見直したいです。
1/14（木）	静岡新聞 中日新聞 朝日新聞 読売新聞 毎日新聞 産経新聞 日経新聞 英字新聞 （1月3日）（B）	スウェーデンの新聞 脅す中国 EUへの視線 日本へ	コロナを自国で感染を押さえ込んだ中国、「権威主義体制の優位性」を誇示。スウェーデンで中国の人権問題を報じるジャーナリスト、クルバンを中国共産党に批判的な書物を扱う閉店に追いまれた書店の「銅像撤去書店」を依頼。スウェーデン1766に世界初の検閲廃止や出版の自由を実現に明記。 民主主義が許されない中国とはコロナを封じ込められたとは言えない。国内の不満が大きいのではないかと思った。

【記録用紙内の記述例３点】

（２）「しずおか新聞感想文コンクール」の結果について

令和２年度に本校から初めてこのコンクールに１年生全員が応募し、県内からの多数の応募の中、２年連続で本校生徒から第３位に該当する入選賞に選ばれた。応募にあたっては、教師側からの特別な働きかけはなかったが、非常にスムーズに校内での回収と事務局への提出ができた。

あたりまえが"あたりまえ"になったこと

奥村　実矢さん（浜松西高１年）

「深い反省」

私は、大きくかかれたこの題に強く惹かれた。おとなし三〇万人の方が犠牲となり、多くの人が不安と絶望をもたらした大戦は、数ある日本の歴史の中で一番大きな出来事といっても過言ではないだろう。「多くの苦難に満ちた国民の涙みを思うと」という天皇陛下のお言葉からもわかるように、戦時中だけでなく、戦後も大変だったと小学生の時に社会の授業で習ったのを覚えている。私は、生まれてから十年、戦争を経験することなくここまで生きてくることができた。これは当たれなく、平成という時代に生まれてきた大人達と、大戦で失われた尊い命のおかげだと強く感じる。今の時代は平和なのは、過去があるからだということを絶対に忘れてはいけない。

「戦争なんてものはするもんじゃないよ。」

そう私に伝えてくれたのは、八十八歳のお祖母さん。十四歳で終戦を迎えた彼女は、戦争を知らない私に様々なことを教えてくれた。彼女の口から語られる言葉一つ一つに私は驚き戸惑いをかくすことができなかった。学校の授業で習ったときにはかんじなかった規模の大きさ、予想を超える被害の大きさ、戦争というものがどれだけ悲惨で残酷なものなのか、私は衝撃で胸が詰まりそうだった。

おばあさんは、私の目をみて何度も何度も「戦争」のおそろしさを伝えてくれた。「戦争なんてやるもんじゃないよ」時に強くみながら何度も伝えてくれるその言葉は教科書からはわからない、平和への思いを強く感じた。

「命の価値」という言葉があるのなら、その価値は昔も今も変わらないはずだ。なのに、人が人を殺すことが二〇日本でおこなわれていたことがあるというのは、とても信ぜられない。

この繁栄らしい日本にとって、戦争の代償ではないか、と思っていた。しかし、今回おばあさんからお話をきいて、戦争があったから、今があるのだと痛感した。今、すごく平和で毎日が人の笑顔につつまれていることの幸せを日本が手にいれることができたのは一度どんな苦難を乗り越えてきたのだろうと思った。

「あたりまえ」になったことに感謝し、脳裏をよぎることを忘れずに、ふり返ればそこにある。このあたりまえが、「あたりまえ」になったことに感謝し、脳裏をよぎることを忘れずに、ふり返ればそこにある。それが今、私たちができることだと、私は強く思う。

入選　高校生の部

戦後七十五年

西藤　実咲さん（浜松西高１年）

【静岡新聞での紹介記事　上・令和元年度、下・令和２年度】

（３）生徒へのアンケート結果分析（資料参照のこと）

《現状分析》

・アンケート調査の結果、生徒の家庭の約30％は新聞を購読していない。

・生徒がニュースを知るのに用いるメディアとしては、ネットと TV で95％を占める。
〈⇔新聞紙の割合は極めて低い〉

・生徒は新聞紙が用意され、それを読む時間を確保すれば、積極的に読む姿勢がみられる。
〈新聞に触れる環境の整備が重要！〉

・新聞が他メディアに対して持つ優位性として、以下の点が特筆される。

「取り上げる情報は幅広く、偏りがなく、読みやすく整理されている。」
「記事に対して責任の所在がはっきりしており、確かな根拠に基づいて書かれており、非常に信頼できる。」

・ほとんどの生徒は、様々な種類の新聞に挑戦できた。
・ＮＩＥ活動によって、国内外の政治分野の関心が高まったとする生徒が多かった。
・ＮＩＥ活動の実践については、約80％以上が肯定的に評価した。

《成果》

・ＮＩＥ活動により、地域社会を含め、実社会への関心がより高まった。
・「しずおか新聞感想文コンクール」への応募については、連続してコンクール上位に選ばれ、大変喜ばしい結果を残せた。しかし同時に、指定された課題をこなすにあたって、半数以上の生徒が、日頃のＮＩＥ活動により、積極的にもしくは面倒に感じることなくスムーズに取り組めたことはＮＩＥ活動の大きな成果として挙げられよう。
・記事を選択して読むだけでなく、内容の要約や感想及び意見を記述するという活動（＝言語活動）によって、自己の情報リテラシーの向上につながった。
・新聞そのものについて、様々な観点から考察できた。

《課題》

・各家庭や校内の新聞コーナーでも新聞を読むようになったとする生徒は全体の30％に留まった。⇒〈ＮＩＥ活動の自主的拡大に難あり。〉

（４）教員からの評価と反省

①ＮＩＥ活動を担当した教員の感想

・「生徒は、新聞タイムを楽しみにしていたようだ。ふざけたり、イヤイヤ取り組んでいる様子を見ることがなく、常に自主的、積極的に取り組む姿勢であった。」
・「『新聞でも報道されていましたが、、、。』や『昨日のニュース見た？』などの問い掛けに対する反応が結構いいと感じられる。」
・「新聞タイムにより、通常の始業よりも落ち着いた雰囲気で授業に入れる。」
・「生徒にとって少しでも新聞の存在が身近になったのではないか。」
・「生徒の実社会に対する関心が高まったといえるのではないか。」
・「訓練というわけではないが、短時間内に興味や関心を持った記事を選んで、内容を理解し、それに関する批評や感想を簡潔にまとめるという活動（＝いわゆる言語活動）を繰り返すことで、『読む⇒理解する⇒表現する』といった能力（＝情報活用能力、情報リテラシー）の向上に役立ったのではないか。」
・「新たに特別な組織を作ることなく、既存の校内システムに改良を加えることによって、ＮＩＥ活動が実施できたこと。“持続可能な活動”になりうる可能性がある。」

②校内におけるＮＩＥ活動の影響、広がり

・活動２年目に「保健」科目の授業２コマで、新聞タイムの実践が取り入れられた。
・英語科で２年生を対象に、英字新聞の切り抜き記事に自主的に取り組ませる試みや、「the japan times alpha」が毎週提供する課題に積極的に取り組ませる等の生徒への働きかけが始められた。
・中等部の国語科の授業において、ストックされた新聞を用いた授業展開が試みられた。
・中等部全学年の社会科の授業で実践されている「新聞スクラップ」への情報提供。

③指摘のあった課題や反省

・授業進度を落とさずに「新聞タイム」を実施すること

例え１年生で履修する「現代社会」であっても、共通テストの科目である以上、学習内容を削るわけにはいかない。本校の研究期間においては、新型コロナ感染症対策のための臨時休校期間（令和２年３月９日～５月16日）が設けられたため、授業の実時数が大幅に減少した。この遅れを取り戻すという環境下で「新聞タイム」の実施するためには、日々の授業展開において、ICT の積極的に活用するなどの他にも、大幅な授業改善（工夫）が必要となり、これらの準備に追われ続け、多忙な日々を送ることとなった。

・共通テストにおいて、具体的に新聞紙面を利用した出題がなされたこと

新聞の「一面」という言葉がわからない生徒がいた。家庭から新聞購読が失われつつある中、学校において新聞を扱うことの重要性が、益々高まっていくのではないか。

（5）今後の課題

最後に本校で２年間に渡りＮＩＥ実践を担当した立場から、感想も交えていくつか記して、本報告書の締めくくりとしたい。

①新聞紙を生徒人数分用意することの困難

家庭から持参させることは、経済的問題の他にも様々な理由から、今後も困難が予想される。一方で、特に高校規模の学校においては、全校単位はもちろんのこと、学年単位の新聞紙を学校側で用意することはほぼ不可能と思われる。そのような状況下において、GIGA スクール構想の下、生徒一人に１台端末の貸与が始まった。新聞データベースのようなサービスが、校内の PC 室だけでなく、これら端末でも利用可能になれば、「新聞紙を用意する」問題から解放され、ＮＩＥ活動に新たな可能性が出てくるのではないだろうか。

②「新聞紙」というメディアの今後～新聞紙を用いた「ＮＩＥ活動」は継続できるのか？

紙媒体としての新聞の発行部数の落ち込みが続いており、この傾向が続けば、2030年には絶滅危惧種になる虞があるといわれている。

図書館でいえば、開架書棚を見て回るうちに、自然な形で蔵書全体を見渡せる。また、思わぬ形で良書に出会う喜びもある。同じような魅力は新聞にも見出すことができる。また、新聞の切り抜きを通じて、模造紙にまとめたり、スクラップを作成するといった従来からの方法は、今でも大きな教育効果を有しているといえよう。

しかし一方で、先程触れた新聞データベースやウエブニュースの活用が進んでいくことは必然ともいえよう。前述の図書館の例でいえば、キーボードで打ち込むだけで、目的の本が用意される自動書架システムのようなものだ。学校現場としては、このようなデジタル化の進行（＝コンテンツだけになった新聞の利用⇒新たなＮＩＥの形）にも対応していくことが急務であるといえるのではないか。

【資料】アンケート調査項目と集計結果について
・アンケート項目は全 17 問。
・アンケート対象は１年生徒のみ。（令和元年度 240 人、令和２年度 238 人）
・実施時期は、令和元年度分については、令和２年６月、令和２年度分については、令和３年２月。
・回収率は、数名の欠席者を除いて全回収できた（100%）。

Q1・あなたがニュースを知るのに、一番利用するメディアは次のうちどれですか？
1、新聞　2、テレビ（地上波）　3、ラジオ
4、インターネット（PC やスマホ）
5、その他

	1、	2、	3、	4、	5、
令和１	6%	43%	1%	50%	0%
令和２	5%	45%	0%	50%	0%

Q2・自宅では新聞を購読していますか？
1、「はい、２紙以上」　2、「はい、１紙」
3、「いいえ」

	1、	2、	3、
令和１	11%	61%	28%
令和２	8%	66%	26%

Q3・上記の設問で１または２の「はい」と回答した場合、授業での NIE 実践の結果、家庭で新聞を読む機会が増えましたか？
1、とても増えた　2、少し増えた
3、あまり増えていない
4、以前と同じで全く読んでいない

	1、	2、	3、	4、
令和１	3%	23%	52%	22%
令和２	4%	41%	35%	20%

Q4・校内の新聞コーナー（新聞閲覧台）で新聞を読みますか？
1、よく利用する　2、時々利用する
3、あまり利用したことはない
4、全く利用したことはない

	1、	2、	3、	4、
令和１	1%	14%	41%	44%
令和２	4%	19%	36%	41%

Q5・授業での NIE 実践の結果、校内の新聞コーナー（新聞閲覧台）で新聞を読む機会が増えましたか？

1、とても増えた　2、少し増えた

3、あまり利用していない

4、全く利用していない

	1、	2、	3、	4、
令和１	0%	13%	40%	47%
令和２	1%	23%	35%	41%

Q6・授業での NIE 実践の結果、地域行事への関心が高まりましたか？

1、とても高まった　2、少し高まった

3、あまり変わらない　4、全く変化なし

	1、	2、	3、	4、
令和１	2%	36%	43%	19%
令和２	6%	39%	34%	21%

Q7・授業での NIE 実践の結果、実社会への関心が高まりましたか？

1、とても高まった　2、少し高まった

3、あまり変わらない　4、全く変化なし

	1、	2、	3、	4、
令和１	10%	51%	30%	9%
令和２	19%	53%	18%	10%

Q8・授業での NIE 実践時に複数紙に挑戦しましたか？

1、英字新聞も含めて、できるだけ色々な新聞を読むように努めた

2、英字新聞以外で、できるだけ色々な新聞を読むように努めた

3、なるべく、自宅で購読している新聞以外の新聞を読むように努めた

4、いつも同じ新聞社の新聞を読んだ

5、あまり意識することはなく、前列から回ってきたものを読んでいた

	1、	2、	3、	4、	5、
令和１	21%	41%	15%	5%	18%
令和２	19%	46%	10%	1%	24%

Q9・上記 Q8 の回答が１・２の場合、特に関心が高まったのは次のうちどれでしょうか？

1、国内政治　2、国際政治　3、国内経済

4、国際経済　5、文化　6、スポーツ

7、その他

	1、	2、	3、	4、	5、	6、	7、
令和１	36%	28%	11%	7%	9%	7%	2%
令和２	39%	28%	13%	8%	9%	2%	1%

Q10・授業での NIE 実践の結果、様々な場面で文章を読み取る能力が高まったと思いますか？

1、とても高まった　2、少し高まった

3、あまり変わらない　4、全く変化なし

	1、	2、	3、	4、
令和１	4%	40%	46%	10%
令和２	2%	52%	38%	8%

Q11・授業での NIE 実践の結果、文章を読んでその内容を簡潔にまとめ、それを表現する能力が高まったと思いますか？

1、とても高まった　2、少し高まった

3、あまり変わらない　4、全く変化なし

	1、	2、	3、	4、
令和１	5%	50%	35%	10%
令和２	10%	52%	31%	7%

Q12･各教室に用意されている『月間　切抜き速報』を利用していますか？

1、よく読んでいる　2、時々読むことがある

3、あまり読まない　4、読んだことがない

	1、	2、	3、	4、
令和１	0%	3%	22%	75%
令和２	1%	4%	14%	80%

Q13・授業での NIE 実践の結果、各教室に用意されている『月間・切抜き速報』の利用頻度は変わりましたか？

1、とても増えた　2、少し増えた

3、あまり変わらない　4、全く変化なし

	1、	2、	3、	4、
令和１	1%	2%	21%	76%
令和２	1%	7%	13%	79%

Q14・夏休みの宿題「静岡しんぶん感想文コンクール」に取り組むにあたり、NIE 実践の影響（効果）があったと思いますか。

1、積極的に取り組めた

2、あまり面倒に感じなかった

3、あまり関係ない　4、全く影響はない

	1、	2、	3、	4、
令和１	9%	35%	45%	11%
令和２	20%	38%	31%	11%

Q15・提供されるニュース（情報）について比較した時、紙媒体の新聞が、TV やネットに対してもっている優位性は何だと思いますか。

1、機器がなくても読める

2、じっくり読める

3、自分の都合に合わせて読める　4、その他

	1、	2、	3、	4、
令和１	23%	42%	26%	9%
令和２	23%	51%	18%	8%

Q16・上記設問とは逆に、TV やネットの、紙媒体の新聞に対する優位性には何があると思いますか。

1、速報性　2、映像　3、料金

4、アクセスの場所　5、その他

	1、	2、	3、	4、	5、
令和１	65%	21%	3%	6%	5%
令和２	64%	20%	4%	8%	4%

Q17・授業での NIE 実践はよかったと思いますか？

1、とても思う　2、少しは思う

3、あまり思わない　4、全く思わない

	1、	2、	3、	4、
令和１	25%	61%	11%	3%
令和２	37%	51%	10%	2%

静岡県ＮＩＥ推進協議会　実践指定校一覧

2000 年度　熱海高、磐田・城山中、静岡西高、静岡聾学校、天竜・下阿多古中、静岡・長田南小、浜松・東小、三島・佐野小、掛川・桜木小

2001 年度　静岡西高、静岡聾学校、天竜・下阿多古中、静岡・長田南小、浜松・東小、三島・佐野小、掛川・桜木小、長泉高、小山・北郷中、浅羽中

2002 年度　長泉高、小山・北郷中、浅羽中、静岡城北高、磐田南高、浜松城北工業高、静岡中央高、焼津中、湖西中、静岡・富士見小、熱海・初島小、浜北・大平小

2003 年度　静岡城北高、磐田南高、浜松城北工業高、静岡中央高、焼津中、湖西中、静岡・富士見小、熱海・初島小、浜北・大平小、天竜養護学校、加藤学園暁秀中・高、浜松・江南中

2004 年度　天竜養護学校、加藤学園暁秀中・高、浜松・江南中、沼津城北高、静岡サレジオ高、城南静岡高・中、浜松・天竜中、韮山中、磐田東中・高、富士宮・大富士小、大井川東小、掛川・日坂小

2005 年度　沼津城北高、静岡サレジオ高、城南静岡高・中、浜松・天竜中、韮山中、磐田東中・高、富士宮・大富士小、大井川東小、掛川・日坂小、湖西高、沼津高中等部、岡部中、浜松・芳川北小

2006 年度　湖西高、沼津高中等部、岡部中、浜松・芳川北小、清水西高、日大三島高・中、東海大付属翔洋高、西部養護学校、磐田・一中、浜松日体中・高、静岡・長田北小、浜松・竜禅寺小、牧之原小

2007 年度　清水西高、日大三島高・中、東海大付属翔洋高、西部養護学校、磐田・一中、浜松日体中・高、静岡・長田北小、浜松・竜禅寺小、牧之原小、不二聖心女子学院、沼津・静浦中、静岡・安東小、浜松・豊岡小、御前崎・一小

2008 年度　東海大付属翔洋高、不二聖心女子学院、沼津・静浦中、静岡・安東小、浜松・豊岡小、御前崎・一小、大井川高、浜松・雄踏中、磐田・豊田南中、御前崎・浜岡中、静大付属静岡中、静岡・清水小河内小、三島・徳倉小、清水町立南小

2009 年度　浜松・豊岡小、御前崎・一小、大井川高、浜松・雄踏中、磐田・豊田南中、御前崎・浜岡中、静大付属静岡中、静岡・清水小河内小、三島・徳倉小、清水町立南小、川根高、浜松江之島高、富士・吉原三中、浜松学芸中・高、静岡・大里西小

2010 年度　御前崎・浜岡中、静大付属静岡中、川根高、浜松江之島高、富士・吉原三中、浜松学芸中・高、静岡・大里西小、常葉学園中・高、下田東中、島田・金谷中、袋井中、静岡・東源台小、浜松・与進小、東伊豆・稲取小

2011 年度　浜松江之島高、浜松学芸中・高、常葉学園中・高、下田東中、島田・金谷中、袋井中、静岡・東源台小、浜松・与進小、東伊豆・稲取小、島田高、島田樟誠高、静岡・清水五中、浜松・北部中、御殿場・南中、磐田・神明中

2012 年度　常葉学園中・高、島田・金谷中、磐田・神明中、静岡・東源台小、浜松・有玉小、島田高、島田樟誠高、静岡・清水五中、浜松・北部中、御殿場・南中、富士宮東高、掛川工業高、浜松・三ケ日中、焼津・大村中、静岡・安西小、静岡・城北小、沼津・原小、静岡サレジオ小

2013年度　富士宮東高、掛川工業高、浜松・三ケ日中、焼津・大村中、静岡・安西小、静岡・城北小、沼津・原小、静岡サレジオ小、金谷高、浜松城北工業高、静岡・高松中、浜松・積志中、裾野・深良中、島田高、常葉学園中・高、島田・金谷中、静岡・東源台小、浜松・有玉小

2014年度　金谷高、浜松城北工業高、静岡・高松中、浜松・積志中、裾野・深良中、裾野高、駿河総合高、島田商業高、静岡・清水興津中、南伊豆・南伊豆中、静岡・清水三保第一小、浜松・平山小、富士・田子浦小、島田・川根小、浜松・三ケ日中、焼津・大村中、静岡・安西小、浜松・有玉小

2015年度　裾野高、駿河総合高、島田商業高、静岡・清水興津中、南伊豆・南伊豆中、静岡・清水三保第一小、浜松・平山小、富士・田子浦小、島田・川根小、東海大付属小、金谷高、静岡・高松中、浜松・積志中、裾野・深良中

2016年度　駿河総合高、島田商業高、静岡・清水興津中、南伊豆・南伊豆中、富士・田子浦小、東海大静岡翔洋小、三島南高、静岡聖光学院中・高、浜松・可美中、裾野・富岡中、静岡・井宮小、富士宮・上井出小、森小

2017年度　東海大付属翔洋小、三島南高、静岡聖光学院中・高、浜松・可美中、裾野・富岡中、静岡・井宮小、富士宮・上井出小、森小、遠江総合高、静岡・観山中、本川根中、富士宮・西富士中、浜松・西都台小、静岡聴覚特別支援学校

2018年度　三島南高、静岡聖光学院中・高、富士宮・上井出小、静岡・井宮小、遠江総合高、富士宮・西富士中、静岡・観山中、本川根中、浜松・西都台小、静岡聴覚特別支援学校、清水西高、菊川西中、西伊豆・田子小、静岡・清水飯田小

2019年度　富士宮・西富士中、本川根中、静岡聴覚特別支援学校、清水西高、菊川西中、西伊豆・田子小、静岡・清水飯田小、浜松西高、常葉大附属橘高、小山中、伊豆の国・韮山南小、吉田・自彊小、湖西・白須賀小、浜松・城北小

2020年度　西伊豆・田子小、伊豆の国・韮山南小、静岡・清水飯田小、吉田・自彊小、浜松・城北小、湖西・白須賀小、三島・南中、小山中、静岡・大河内小中、掛川・桜が丘中、清水西高、常葉大学附属橘高、浜松西高、清水特別支援学校

静岡県ＮＩＥ推進協議会

〒422-8033
静岡市駿河区登呂３丁目１番１号
（静岡新聞社内）
TEL 054－284－9152
FAX 054－284－9362